

◆ 研究ノート

ヴェブレンの『製作者本能と産業技術の現状論』を読み解く

中京大学経営学部名誉教授 寺岡 寛

Reading and Interpreting Thorstein Veblen's "The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts"

Teraoka, Hiroshi (Professor Emeritus, Chukyo University)

キーワード 職人魂, 本能論, 金銭文化, 略奪文化, 産業技術, 下位文化, 歴史, 制度

1. はじめに

ノルウェー系アメリカ人のソースティン・ヴェブレン (1857～1929) は、アメリカ経済学史のなかでも異例な存在である。ヴェブレンの経済学の根底には、「人間性」へ最大の関心があり、「人間と社会」との関わりにおいて「経済」をとらえようとする強い意志を感じる。のちにヴェブレンの経済学は、「制度派経済学」や「進化論的経済学」と総括される。こうした名称もさることながら、ヴェブレンの経済学は人間と社会との関りを追求した「経済社会学」の祖といってもよいのではないか。

とりわけ、“The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts” はヴェブレン経済学の特徴をよく表している。署名の「ワークマンシップ」については、「製作者本能」と訳されたりしてきた。現在では「モノづくり本能」と意識してもよいかもしれない。ここでは、本書に時代性を考慮して、手工業時代、あ

るいはそれ以前から製造・製作に根付いてきたモノづくりの本能や精神に関係してきた「職人魂」の方が適訳のところもある。

この著作が刊行された1914年は、第一次世界大戦勃発の年にあたった。ヴェブレンの名前が知られるようになった『有閑階級の理論』の刊行が1895年、『営利企業の理論』の刊行が1904年であり、そこから10年余りあとの著作であった。この間のヴェブレンの生活環境は大きく変わっている。ヴェブレンは1893年にシカゴ大学の助手 (teaching fellow) に採用されたあと、1895年に講師、1900年に助教授へと昇進したが、1906年にはシカゴ大学を去っている。翌年にはカリフォルニア州へ移り、スタンフォード大学の助教授の職に就いた。この年と翌年に父と母を失っている。1909年にはスタンフォードを去り、ミズリー大学の講師となっている。ミズリー大学も8年ほど在職しただけで、その後、ニューヨーク市の新社会科学学院 (New School for Social Research) に移っている。ヴェブレンはこの時期に活発な執筆活

動を続けている。教職からの引退は1927年であり、カリフォルニア州パロアルト市で隠遁生活を送った。

小論では、『製作者本能と産業技術の現状』¹⁾でのヴェブレンの考え方を読み解き、現代社会に何を伝えているのかを考えたい。ヴェブレンの文章は、ときとして持って回った言い回しや、回りくどい表現に溢れ、お世辞にもわかりやすいとも、洗練されたとも言い難く、日本語に移すのが容易ではない場合も多々ある。ここではヴェブレンの大意優先で意訳も試みたい。同書の目次はつぎのようになっている。

はしがき

第1章 緒言

第2章 原始技術における本能の汚染

第3章 産業技術の未開の状態

第4章 略奪的な文化の技術

第5章 所有権と競争システム

I 平和的所有権

II 競争システム

第6章 手工業の時代

第7章 機械産業

ヴェブレンは、「はしがき」で本書のねらいを「本論では、産業的用途と慣習の間に認められ、文明のあらゆる段階を構成するその他制度的事実との間の相関関係を分析する。技術の利用と慣習の事実は、文化の発展でも、またその維持でも、根本的かつ決定的であると想定される。それは技術の側面以外の文明の範囲と方法を基盤とし条件づけるという意味でもそうだ。だが、それは特定の文明の慣習などが、逆に産業技術の状態に及ぼす影響の程度を排除し、見過ごす意味ではない。この分析は現代科学の唯物論的前提に基づき進める。だが、この唯物論的教義が形而上学的概念とされる最終的妥当性の根本的問題を損なうものではない。この考察では、現在の先入観の状況で同様の科学的課題への現在受け入れられる解決条件を提供しているため、当面目的のために物質科学の機械論的仮定を単純に受け入れるだけである。この論考のわずかな長さからわかるように、これは徹底的な研究と完全な文献提示を伴う網羅的な研究

というよりは、概観的な研究の性質をもつ。したがって、議論の過程で提示する数少ない参考文献や引用された権威は、研究根拠となる資料の包括的な提示ではない。また、公的文書からの引用は具体的かつ詳細なものではなく、一般的かつ広範囲であることにも留意されたい。参考文献が詳細に示されている箇所では、それらが議論に具体的事実を例示として導入していることを確認されたい²⁾と述べる。言い訳がましい文章である。参照・引用文献を多数参照したような厳密な研究論文ではなく、ヴェブレンは自分自身の理論を自由に展開したいと語っている、といつてよい。

2. 人間と本能論

ヴェブレンは、人間もまた他の高等動物と同様にその本能によって行動が規定されていることを指摘する。本能＝行動の原動力である。人間はそこから人生の目的と効率性だけでなく、喜びも苦痛も生み出されるとする。ヴェブレンはこの問題を対象とする心理学や生物科学について必ずしも好意的にとらえていない。ヴェブレンは、『本能』とは、網羅的な心理分析の必要性を満たすにはあまりにも不正確な性質である³⁾と述べたうえで、人が作りだす制度の性質と原因の考察については、徹底的な心理学的分析の必要性があるわけではないとする。ヴェブレンの関心は、人間の本来的（遺伝的）な性向と物質的環境がもたらす制度である。その際には、ヴェブレンは「古くから使われてきた『本能』という呼称以上に適切な名称は存在しない⁴⁾」と考えたのである。とはいえ、人間の行動を規定する「本能」なるものが単純で還元不可能な心理的要素の複合機能群に分類されるが、社会科学でもそのような傾向にあることに言及する。ヴェブレンは人間にはいろいろな性向があっても、それを「本能」として一括しても、「多かれ少なかれ強迫的に、努力の客観的目的を提示するという共通の特徴を持つ。一方で、ある本能と他の本能を区別する点は、それぞれの本能が、他の本能の客観的な目的とは異なる、

特徴的な目的、目標、または達成すべき目標を設定する点にある。さまざまな本能は目的論的なカテゴリーであり、口語的な用法では、その目的論的内容に基づき区別・分類される。……『本能』とは、向性（tropismtic）行動とは対照的に、目指す目的に対する意識と適応を伴うのである」⁵⁾と指摘したうえで、この概念は人類の本能的傾向に関する議論への拡張性に注目している。ここでいう「向性（tropism）」行動とは、植物の生長運動にみられるように、光などの外部の刺激に対して、その方向へと向かい、あるいは、逆の方向へと向かうことで成長する性質を指す。

人間の「本能」が他の動物と異なるのは「知性」にある。ヴェブレンは「本能」と「知性」の関係性に注目している。すなわち、「人類の際立った特徴は、他の動物が及ばないほどの知性によって、人類の本能的な性向が導き出されていることにある。しかし、知性の介入があっても、人類が本能の賜物に依存していることには変わりはない。なぜなら、本能に促された場合によってのみ、思索や熟慮が行われるからである。また、本能は、こうしたすべての思索と熟考において知性の及ぶ範囲と方法を支配しているからである。人は考えるが、人間の精神、つまり人種的に備わった本能的な性向が、何を、どのように、どのような効果で考えるかを決めるのである」⁶⁾。とはいえ、ヴェブレンはその関係性の実証の難しさにもふれたうえで、そのために利用可能な手段や方法は、実際のところ、過去からの伝統や過去世代の経験を通じて蓄積された思考習慣（a legacy of habits of thoughts）という遺産であるとした。ヴェブレンは、「制度」へのとらえ方について、「習慣化の規律の下で、この論理と方法の論理と方法・手段は慣習的な線にそって、慣習と規範の一貫性を獲得し、こうして制度的な性格と力を帯びるようになる。慣習化された行動や思考の様式は、当然ながら習慣的であり、容易かつ明白になるだけでなく、同様に社会的慣習によって承認され、それゆえに正しく適切と見なされ、行動の原則を生み出す」⁷⁾と指摘した。

ヴェブレン自身は心理学に多々言及しており、当時の心理学や生物学をかなり研究していたことがわかる。その一方で、その成果を経済学へ直接応用できるかについて懐疑的であったように思える。人の思考・行動における「遺伝的特徴（hereditary traits）」≒「本能」や生物的（遺伝的）な要因などとの関係を単純にとらえることは容易ではない。そのため、ヴェブレンは「いくつかの本能的性向間の授受（give and take）関係、つまり、『接触』、『汚染』、『相反する目的』は、より単純で明らかに向性的な衝動においては、おそらくより微弱で重要性が低い。一方、より具体的でなく曖昧な本能的性向、たとえば親性への傾倒や構築・獲得への傾向といったものは、相互相関と相互依存の網の目に包括的かつ複雑に絡み合い、絶え間なく互いに汚染し合い、相殺し合い、強化し合う。そしてそれぞれが他のすべてとの共通点の範囲が非常に広大であり、流動的であるため、それらを厳密に区別する境界線を引くことはほぼ不可能である」⁸⁾と指摘する。人といっても、そこにはさまざまな人種（race）がいる。この点について、ヴェブレンは「人種的特質といっても、ある程度の曖昧さ、普遍性や自動的に決定される反応の欠如、いわゆる人間の本能に共通する具体的な帰結性の欠如となる。本能の曖昧で移ろいやすい性格は、おそらく刺激に対する慣習的な反応は、その生理学的な根拠の広さと多様さと関連させてとらえるべきものである。人種の長期的な成功にとって、それは明らかに最高の価値を持つ。なぜなら、製作者本能の感覚に対して、試行、慣れ、発明、適応の広くて容易な余地を残しているからである。……間違いなく、いくつかの人種的系統は、この点において非常に顕著な差異がある。本能的性向の補完物、すなわち生来の性向とその適切な感情の両方を用語で包含するものは『人間の精神的性格（“spiritual nature” of man）』、しばしば『人間性（human nature）』と呼ばれるものを構成する。『精神的（spiritual）』という用語は、物質的現象と非物質的現象の二元論や二分法のようなものを暗示することなく、口語的な意味

で便宜的に用いられる。したがって、この用法は人間の単一か二重かの問題に対し何ら態度を表明するものではなく、単に現行の用法によってその機能を補完するものとして慣用的に用いられてきたものを指し示すに過ぎない⁹⁾と述べる。

人の行動やその背景にある慣習的思考のこうしたとらえ方は、欧州系だけでなくさまざまな人種的構成のアメリカに住むヴェブレンにとって単純なものではなかったことがわかる。こうしたハイブリッドな社会において、ヴェブレンはその共通性を見出そうとする。「こうした混血集団 (hybrid populations) の中であっても、人類全体に遍在する一般的な平均として、また社会における人類の継続的な生存に適した、普遍的に人間的なタイプの精神的資質が貫かれているのである」¹⁰⁾。こうした認識の下で、ヴェブレンは歴史をどのように解釈するのだろうか。「西洋諸国の人口を構成する人種の混合体では、混血集団を構成する複数の人種の系統の間で、生存をかけた競争的闘争が常に続いてきたように見える。そして、移り変わる文化的要請と機会によって、時にあるタイプが、また時に別のタイプが有利になることで、それぞれの運命は変化してきた。人種間の生存競争でのこうした文化的生存条件は、何世紀にもわたって変化し、人種とその文化の生活史に重大な結果をもたらし、おそらく、歴史的期間のどの時点よりも、いま現在、より大きく、より急速に変化しつつある。……法的・慣習的な制度体系において進むこれらの絶え間ない変化と適応は、コミュニティでの仕事と思考の新しい習慣を絶え間なく誘発し、それにより新しい行動原理を浸透させ続ける。結果、人口に生来備わっている同範囲の本能的性向が、人種の生存要求に関しては異なる効果を発揮することになる」¹¹⁾。そうした文化的状況と経済の適合性 (economic fitness) との関係とは何であるのか。ヴェブレンは文化的新興国のアメリカではなく欧州社会の歴史を念頭において考察しているものの、その先にはアメリカがあったことはいうまでもない。文化的状況の蓄積としての制

度の下での人の「本能」について、ヴェブレンは「制度的構造の変化は、文化的条件の変化による生活規律の変化に応じて絶えず起こるが、人間の本性は本質的には変わらない。したがって、生来の性向がその目的を達成する物質的、物質的な方法と手段は、生活体系を支配する慣習的要素の制度的構造において累積的に進行する変化によって条件付けられ、つねに変化し続ける」¹²⁾と述べる。

ヴェブレンの行論には、当時の彼の生物学的知識が反映されている。動物である「人」の「本性」には動物的な働きが作用する限りにおいて、生物学的アプローチは当然であったといえる。たとえば、つぎのようなとらえ方もそのようなアプローチを示唆している。「ヨーロッパ人のような混血起源 (hybrid origin) のいかなる集団も、集団内での継続的な交雑の中で、最終的に混血集団の親系統の究極的な人種類型のいずれかの一種類でなく、選択的に有利な類型に忠実に累積的に繁殖する傾向を示すだろう。……そのような混血系は、暫定的にしか安定せず、交配元のいずれの親系統に戻した場合でも崩れ去ってしまう。……混血種集団は、純血種の限界内で得られるものよりも広範囲で多様性に富む人間性 (human nature) をもたらす。……動物学者が、人類のさまざまな人種を、身体的特徴に基づき単一種に帰属させるのに何らむずかしさを感じないのと同様に……。さまざまな本能的性向の重点の配分は人種によってかなり異なるかもしれないが、さまざまな人種に固有の本能の総体は、つまるところ、ほとんど同種であり、実質的に同じ目的を含む」¹³⁾。要するに、ヴェブレンはいろいろな人種の違いをこえて、その本質には共通の遺伝子的特徴としての「本能」があることを強調して、「人類の物質的幸福、ひいては生物学的成功に直接寄与する本能的性向のなかでも、おそらく最重要なものは、製作者魂と呼ばれる本能的性向であろう」¹⁴⁾と指摘する。なお、ヴェブレンはよく遺伝≡「親性 (parental bent)」に言及するが、この用語については「単に子孫を残す性向を超えた、はるかに広範な本

能的性向である」と定義づけている。

ヴェブレンは、「製作者本能 (instinct of workmanship)」や「製作者感覚 (sense of workmanship)」について、「人類に不可欠な遺伝的特質 (integral hereditary traits of disposition) の一つであり、これ単独で人類の全体像を明らかにするものではないことを断っている。他の動物との関係では、そのような「本能」と「知性」が結びつくことが他の動物との違いであり、またそこに「目的論」的なことが関与する。すなわち、「あらゆる本能的行動は目的論的である。それは目的の堅持を伴う。それは何らかの目的を達成することを目指し、行動を促す本能的性向の監視下で本能的に与えられた目的を達成するためにある程度の知的能力を伴うのである」¹⁵⁾。ヴェブレンはつぎのように総括する。

「この目的論的活動 (teleological) 複合体での製作者の本能の位置付けは特異であり、その機能的内容はそれらの目的が何であれ、生命の目的のために役立つ (serviceability) ことにある。……とはいえ、製作者本能はそれ自体、注目と感傷の対象であることに変わりはない。手近な手段を効率的に用い、生活のために利用可能な資源を適切に管理すること自体が努力目標であり、この種の達成は満足の原因なのである。あらゆる本能的行動は知的かつ目的論的である。本能的傾向の一般性は、単にその特定の目的を直接的かつ明確に達成するよう促すものであり、その直接的な導きの下での行為において、行為者はできる限り直接的に目的へと向かう—行為者は客観的目的に専念して、目的達成の手段選択には関心がない—。一方、製作者本能の衝動の下では、行為者の関心と努力は目的達成のための方法と手段を考案することへ注がれる。(中略) 一方、製作者本能は、効率性と経済性、熟練、創造的作業や事実 (現状) への技術的掌握といった、実用的手段や方法、工夫や仕掛けといったものへと関心が向かう。製作者本能の機能的内容の多くは、苦勞を厭わない傾向にある。この性質がもたらす

最良あるいは最終結果は、仕事に関連する、または仕事の目的を果たす本能的性向のいずれかによる大興奮のストレスや極度の緊急性のもとでは得られないものである。」¹⁶⁾

ヴェブレンは人間のそうした「本能」を固定的とは考えていない。それは「柔軟性」をもつものの、「人間の多くの本能の曖昧な性質であり、結果、習慣化によって柔軟性が生まれ、それにより人間の本性が新たな生活条件へのかなりの適応余地を提供することも注目すべきである。しかし、結局、人種の本能的性質は変化状況に効果的に適応できる余地で比較的狭いことに変わりなく—制度の変異範囲と比較すれば狭い—、そのような適応の限界は幾分か硬直している。……こうした状況下での生存に不可欠な要件は、手元の物質的手段を無私無欲かつ客観的に最大限活用する性向と、集団の生命を維持するためにあらゆる知識と物質的資源を活用することへの志向である。……製作者の本能は人類の生活を獣から人間の領域へと引き上げ、その後の文化の発展において、それは常に人間の営みに浸透し続けてきた。しかし、制度の発展と知識の蓄積によってもたらされた状況の複雑化と後世世代の考え方の変化により、その範囲と規範と論理を、生計手段とはほとんど関係のない活動や状況にまで拡大させることになったのである」¹⁷⁾。

3. 原始的技術と本能

ヴェブレンは、「あらゆる本能的な行動は発達の対象となり、それゆえに習慣によって修正される」¹⁸⁾と述べたうえで、「人間においても、同じ事実によって、習慣はより累積的な性格を帯びようになり、人類の習慣的に習得したものは、伝統、訓練、教育、あるいは若者が年長者の学んだことを習得する習慣化の訓練であり、それを最も適切に表す一般的な用語によって、世代から世代へと受け継がれる。同様の手段によって、習慣的な行動の同じような要素がひとつの共同体や文化から別の共同体や文化へと引き継がれ、さらに複雑になる。ゆえ

に、習慣は累積的に、慣行や慣習、会話、先入観、複合的な行動原理を生み出す。これらは人種の生来の性向へ間接的にしか遡らないが、あたかもこれらの習慣的要素が素朴な偏見の性質を持つかのように、あらゆる特定の努力の展開に影響を及ぼす可能性がある。・・・・・・職人(技)は、このようにして受け継がれ、現在も蓄積された知識に基づいて進められ、生活の物質的な手段を扱う際にそれが活用されるのである。このように事実の知識として受け継がれるものは、可能な限り活用され、慣習的な手法や手段の枠組み、すなわち技術体系(system of technology)へと組み込まれる。そこでの新たな情報の要素や物事の性質・用途に関する知見が吸収され、一体化されていくのである」¹⁹⁾と指摘する。

ヴェブレンはこの章で「汚染(contamination)」を用いるが、この言葉は現在のわたしたちにとっては公害をすぐにイメージさせる。たとえば、ヴェブレンはつぎのように使っている。「あらゆる人間の働き(working)において、本能は絶え間なく相互に『汚染』され、それによっていずれかの働きも、他のすべてに内在する偏見や性向により間接的に影響を受ける。そして、現在の習慣や慣習(habits and customs)が、このようにひとつの本能または特定の本能群の下にある性向を強めるようになると、そのように強調された偏見は、コミュニティの成員の思考習慣に浸透するようになり、コミュニティの技術的な基盤(technological groundwork of the community)に対応するかたちを与える」²⁰⁾。ここでは、「汚染」とは互いに影響を与えるような意味で使われている。興味あるのは、ヴェブレンが製作者本能とイノベーションとの関係を論じようとしていることである。すなわち、「イノベーション、つまり新たに獲得した技術的洞察力の活用は、製作者本能以外の衝動によって強制される制度的要件によって大きく妨げられる」²¹⁾。製作者本能以外の衝動として、ヴェブレンは「年功序列(customary prerogatives and perquisites of the older men, rule of seniority)」、「老害

(gerontocracy)」や「通過儀礼とこれに関わるタブー」を挙げ、いずれもイノベーションを阻害するとした。ヴェブレンはつぎのように指摘する。

「集団間の摩擦や嫉妬が助長される条件下では、この傾向は権威と服従の制度的習慣として定着する。そして、結果として生じる統制の行使が慣習によって年長者階級に委ねられている限り、直接の帰結として共同体全体の自発性の著しい減退が生じ、その結果、技術体系でも、また共同体の生活を導く慣習的用法でも保守主義と停滞の様相が現れる。したがって、こうした本能的な性向は、製作(技)の観点ではさほど重要ではないものの、集団の理想を形づくる技術的装備では非常に重要な役割を果たし、製作者本能の感覚で物質的効率を素朴に追い求めることから逸らすことになるかもしれない。」²²⁾

ここで、ヴェブレンが「権威と服従の制度的習慣」がイノベーションを阻害する事例として、「長老支配」の弊害にこだわりをみせる。たとえば、(1)「年長者の指導は権威的な口調で、自己顕示欲と擬似親的な配慮が混ざり合って、若い世代を年長者に従属させる制度的結果をもたらす。表向きは関係する双方の相互的・集团的利益のためとされるのである」²³⁾という指摘は典型である。(2)「もし略奪的あるいは好戦的な行為が共同体においていかなる程度であれ習慣化すれば、自己拡大の感情が優勢となり、健やかな長老への従属がこの保護関係での支配的なものとなる。そして次世代の幸福に対する親の関心は、相応の程度、好戦的で利己的な感情の圧力の下で停止状態となり、多かれ少なかれ冷酷な性格の強制的な体制を生み出す」²⁴⁾とされる。(3)「そうした体制の下で、長老たちは自らの特権と集团的裁量権を執拗に主張し続ける一方で、共同体としては、彼らの判断と先例を習慣的に受け入れる傾向となる。結果、普遍的な依存が生じ、全くの真正性という大原則が蔓延し、蓄積された先例とタブーを打ち破る力などどこにも存在しないことになる」²⁵⁾。これが世代間で繰り返される。この観察眼は、現

在の組織観察においても首肯できる。かといって、ヴェブレンは、親世代が継承してきた伝統的価値観などと製作者魂のような本能とはどのように相互に関係し、どちらが主導的(leading)であるのかを見極めることは容易ではないとしたうえで、「製作者本能とは、主に親の性向が価値あるものと見なす目的を成し遂げようとする傾向にある」²⁶⁾とも主張する。なお、ヴェブレンは、この章でワークマンシップ≡「製作者本能」や「職人技」について随所で明確な定義というよりも、その属性や特徴をいろいろな文脈の下で述べている。たとえば、「製作者本能」という感覚は、本能的な行動を促すだけでなく、本能的な性向に対しても感傷的に思いを巡らせること。こうした分析において、ヴェブレンは社会的現象を経済学や社会学だけから分析するのではなく、自然科学、とりわけ生物学や心理学などから得た知識を応用していることが理解できる。ヴェブレンを単なる経済学者の範疇に閉じ込めて理解することだけでは、ヴェブレン思想を明らかにすることは困難であることがわかる。技術の発達によって蓄積された技術と伝承されてきた職人技との関係はどうであろうか。たとえば、「職人技とは、その成果が事実上の仕事である場合に限って効果がある。職人(artificer)が取り組む事実の中に見出される。あるいは事実に戻せられるより高尚で微妙な潜在力は、見かけ上の効果しかない方法や集団に職人を導き、その努力をそらし、挫折させるだけである」²⁷⁾という指摘はどうであろうか。人は「道具を使う動物(too-using-animal)」であり、手工業時代の職人技—巧妙な道具や機械的な工夫に頼らず、手先の器用さだけで自分を生かす職人技²⁸⁾—は、機械の普及とともに製作者精神(workmanship)はどのような変容していくのだろうか。ヴェブレンはいろいろな学問分野からの分析を加えつつも、その関心もそこにあった。欧州(北欧)などの石器時代以来の歴史についても言及する。

職人の精神に関して、ヴェブレンは「好奇心」との関係についてもしばしば取り上げる。ヴェブレンは「人間の好奇心は疑いなく『無目的』

な性向(idle propensity)であり、その習慣的な活動には単一の目的が含まれないという意味でそうである。しかし、この手段によって行為者の利用可能な知識に引き込まれる物質的情報は、それにもかかわらず、職人技の目的を果たすために役立つのである」²⁹⁾といいつも、同時に「好奇心に駆られて得た事実の大半は、技術・技能の向上にはまったく影響はなく、その有用性があるのかどうかは実質的には偶然の産物に過ぎないのである」³⁰⁾と穿った見方を示す。産業資本主義の時代に生きたヴェブレンは、『営利企業の理論』でも展開した手工業の時代から機械化の時代へと移った働き方、企業組織、営利原則のあり方を、極端に言えば先史時代にまでさかのぼってその起源を明らかにしようとした—成功したかどうかは別として—。ここでも「人類史家」として、農耕時代(牧畜時代も含め)の女性の役割や母性のあり方にも関係させて、製作者精神や職人技の蓄積と人のもつ「好奇心」(idle curiosity)との関係をその後に行ってくる機械化の時代—「強権的な政府(coercive government)、階級分化(特に金銭面で)、好戦的な理想と野心、そして富の相当な蓄積の大規模な文明」³¹⁾—との関係を見通そうとしている。ヴェブレンは、この章の最後に「この初期の平和的な状況に関するさらなる考察は、文明が相当に進んだ段階でのあらゆる事例において、それを置き換えた略奪的文化(predatory culture)への移行期に、消滅した技術的根拠と関連して必然的に提起されるだろう」と結ぶ。必ずしもわかりやすい結論ではない。ヴェブレンのそれまでの行論からすれば、この章の表題にある「原始的な技術」≡職人技的な手工業技術が人の好奇心など「本能」との相互関係—ヴェブレンの言葉では「汚染」—によって、つぎの時代—技術優位の機械化時代—へと切り開かれていくことを示唆しようとした。

4. 産業技術の未開の状態

ヴェブレンは冒頭で「技術的知識は共通の財産としての性質を持ち、共同体によって集会的

に保持・継承され、この関係において共同体は継続組織体 (going concern) としてとらえられる」³²⁾と前置きしたうえで、「産業技術」≡「工芸」についてつぎのように指摘する。

「産業技術 (industrial arts) の状態は、集団生活 (group life) の事実であって、個人の独創的活動や革新 (イノベーション) によるものではない。それは集団の営みであり、個人が単独で、あるいは孤立して自給自足的に行う創造的成果ではない。概して、産業技術の状況は、つねに過去の遺産であり、それは変化し続けるが、その本質部分は前世代から受け継がれた知識である。洞察と熟練の新しい要素が、現世代の経験と創意工夫により絶えずこの共通の蓄積に加わり、組み込まれる。しかし、そうした新たな要素は、過去から受け継がれてきた技術体系全体と比較すれば、いつでも、また、どこでも、些細で取るに足らないものである。」³³⁾

先の章でも使われていたが、現在のわたしたちにとっても新鮮なのは、この時点 (1914年) でヴェブレンは「イノベーション」という言葉をしばしば使っていることである。ヨーゼフ・シュンペーター (1883-1950) は、『経済発展論』 (1912年) で「新結合」≡イノベーションの概念を展開させている。当時、同書はそんなに多くの読者を獲得していたわけではなく、ヴェブレンがシュンペーターの著作にどの程度ふれていたかはわからないが、ヴェブレンがイノベーションに言及していることに着目しておいてよい。そうした新技術やイノベーションも過去の技術蓄積との関連で起こり、また、それは個人によって生み出されても、集団性を持つことで社会全体へと広がっていくことが強調される。つまり、「いかなる新たな技術的出発も、必然的に特定の個人による職人的な努力から始まるが、それは集団がすでに持っている知識体系に精通していることによってのみ可能となる」³⁴⁾のである。産業発展はこのような経路で展開するというのがヴェブレンの見立てである。また、興味あるのはヴェブレンが、集団性としての民族と民族性≡遺伝性にも留意してい

ることである。日本にも言及されている。紹介しておく。「留意すべきは、欧州や日本のように、大きく異なる人種的血統が混ざり合った混血民族 (Hybrid People) は、他の面と同様に職人技でも、生まれつきの才能でも多様性と幅広い個人差がある。……しかしながら、いかなる二つの混血民族間においても、技術の特徴と日常的な職人技の両面において、依然として顕著な決定的な違いが存在する可能性がある。これは日本と西洋諸国との対比が示す通りである。これらの人種間の資質の差異は、最初はわずかなものかもしれないが、累積的に作用するにつれて、その最終的な影響は依然として非常に顕著となりうる。そしてそれらは、特定時点での技術的状況の特徴だけでなく、技術的進歩の速度や方向性でも顕著な差異をもたらす結果となり得る。したがって、極東 (the Far East) では、西洋諸民族とは対照的に、関与した民族の才能は、もっぱら西洋の技術の特徴である、やや粗野だが効率的な機械的手段への依存ではなく、むしろ手工業の熟達という方向性を取ってきた。」³⁵⁾

わたしたちからすれば、日本は単一民族というとらえ方が支配的で、欧州と同様のいろいろな人種が交じり合った混血民族というヴェブレンの見方は新鮮でもある。ヴェブレンにとって「混血」は、技術においてもヴァリエーションをもたらすものとされる。ヴェブレンは、他の著作でも同様であるが、人種に内在する遺伝的要素など人類史的な見方を重視する。改めて、ヴェブレンの広範な知的興味といろいろな分野、とりわけ人類学や民族学の学問的成果を吸収しようという意欲に驚かされる。ヴェブレンの職人技の歴史的な位置付けるについてのつぎの指摘もそうである。「これら三つの人種の系統の違いは、本能的資質や知的能力よりも身体的特徴においてより顕著である。しかしながら、三者の類似性は身体的側面でもかなり特徴的であるため、人類学者はこれら三つをまとめて『白人』あるいは『コーカサス』人種に特有のものとして分類する傾向にある。同じことは、一方では極東、他方では南アジアの特徴的

な文明を築いた人種系統の集団にも当てはまるように思われる。また、アメリカの古代文明に関係した人種系統の集団にも言えるかもしれない。付け加えるなら、長きにわたる技術の進歩、つまり、職人技の長年にわたる継続的な経験の蓄積と、その結果として得られた生活様式や手段に関する知識の蓄積がなければ、欧州のどの民族も生き残れなかったであろう。こうした先行する技術の進歩と、それに伴う制度の発展がなければ、そのような変異種はその才能と限界とともに絶滅していたはずである」³⁶⁾。課題はそのような制度とは何であるのかである。欧州の新石器時代初期においては、異なる人種間の戦い—ヴェブレンは随所で指摘する—の下にあった生存競争の第一の要件は、手元の仕事に注意を払うこと、集団での自給自足体制、子孫の育成への細心の注意であった。ヴェブレンによれば、これらは親心（parental bent）と職人魂とされたのである。ヴェブレンは欧州中央や北欧地域—ヴェブレンがノルウェー系であることも関係して—の民族史などを紹介しつつ、職人技と芸術的要因との関係についてつぎのように指摘する。

「この先史時代の文化は、その細部の多くにおいて、西洋ヨーロッパの産業技術の後期発展で再び前面に出たのと同様に、機械的工夫（mechanical expedients）の活用の熟達ぶりを示す。西洋文化は卓越して際立っており、同様に北欧の先史時代の技術をもっぱら特徴づけるのは、それが扱う機械的要素（mechanical factors）を容易に掌握している点にある。ただし、この地域の先史時代遺物は、その他の点で高度な文明のレベルを示唆するものではない。（実際、華美で壮大な建造物は存在しない。あるとしても、中程度の大きさの塚や古墳であり、石材を使用する場合でも未加工の石のみを用い、それを機械的にうまく活用している。確かに、石器時代の建造物、構造物、装飾品など、そのデザインや製作の上手さにおいて、当時の磨かれた火打石製の木工用斧や鑿（ノミ）に匹敵するようなものは何もない。それは、素材や

装飾要素の選択とそれらの使用の両方で示される職人技を通じて美意識に訴える芸術である。この技が、より野心的な装飾効果や生命体の表現、あるいは青銅器時代後期のようにほとんど認識できないほど様式化されていない表現を目指す場合、その結果として称賛されるのは、その職人技だけであり、芸術的效果に関する限り、それは主に無駄な職人技である。」³⁷⁾

やがて、そうした職人技が異なる共同体間で模倣（borrowing）されるにつれ、のちの産業技術のベースとなっていくことになる。

5. 略奪的な文化の技術

「どのような文化においても、技術的洞察や熟達の手法は、明らかに集団生活の産物であり、個々の職人といえどもそのような集団的産物＝共通の技術成果（common stock of technological equipment）にアクセスできなければ、産業界においても無力（of no effect）である。とはいえ、ヴェブレンは「特別な才能や、この共通の素質に基づく特別な訓練によって、個人でも仲間の中で傑出した功績と価値ある労働者として頭角を現わせるかもしれない。一方で、労働者としての適性がなければ、たとえ最大の機会と最も熱心な訓練を受けたとしても、労働者として価値ある成果を上げることはできないだろう」³⁸⁾としたうえで、この場合の特別な才能は「集団的血統（group pedigree）」というよりも、「集団的な技術（group technology）」によるものであると考えている。ヴェブレンは、「個人は遺伝と環境の産物である。そして遺伝は常に集団遺伝であり、おそらく人類においては特にそうである。ヴェブレンはメンデルなどの遺伝子研究にも言及する。あまり分業が進展していなかった「下位文化（lower culture）」—ヴェブレンはこの言葉をよく使用するが、文脈からみて芸術や技術などの発展がまだ低位である社会を示唆するとみてよいだろう—の社会では、「技術知識と技能の共通基盤は、一般人が何らかの形で理解

できないほど広範囲でも難解でもなく、その本質は、広く知れ渡っていることで社会のあらゆる成員がアクセス可能であり、産業技術の現状に必要な訓練は、日常生活の営みの中で当然のこととして誰にでも与えられるものである。必要な道具や器具などの資材設備はわずかで、その入手は日常のルーティンの中で自然に処理される簡単なことである」³⁹⁾と指摘する。

ヴェブレンはそのような技能＝職人技について、「人類の本能的資質に基づいて一般化してとらえられるかもしれないが、人間の職人技への感覚は、手元にある技術的知識を否応なく利用し続け、そうして時間がたてば、おそらく知らぬ間に得た進歩によって技術的枠組みを徐々に変容させるのである。したがってそれに応じた慣習的な行動規範の枠組みも変容する。そして圧倒的な状況がなければ、この変化の連鎖は概して、高度な技術的支配力の方へと向かわざるを得ないのだ。その限界は物質的状况あるいは制度的状況によって設定されるかもしれないが、低水準の文化においては、そのような進歩に対する克服不可能な障壁は、物質的状况によって課されたもののように思われる。もっとも、制度的要因はほとんどの場合において進歩を著しく遅らせ、多くの場合それを阻害した可能性が高い。その限界は物質的状况あるいは制度的状況によって定まるかもしれないが、低水準の文化（lower level of culture）では、そのような進歩への克服不可能な障壁は、物質的状况によって課されたもののように思われる。もっとも、制度的要因は、ほとんど進歩を著しく遅らせ、多くの場合、それを阻害した可能性が高い。既知の低位文化のなかには、技術分野のこの越えがたい結合（impassible conjuncture）が時折達成され、産業技術や経済的、その他の社会的制度が『定常状態（stationary state）』に陥る結果をもたらしてきた」⁴⁰⁾と指摘する。こうした事例やその論証については、エスキモー社会や南アメリカ大陸の伝説的なパタゴニア人社会、旧石器や新石器時代の社会にも言及するヴェブレンの見方の射程はかなり長いといつてよい。旧石器時代には、

「既述の産業技術の段階を超える初期の進歩の結果として、旧石器時代とほぼ一致する時期に生じた技術の一つは、一方で『間接的生産方法』への目立った移行である。これには体系的な耕作、動植物の家畜化が含まれる。あるいは産業用器具（industrial appliances）が相当に整備され、いずれの場合も意図した労働の支出を必要とし、生計を立てるために器具の所有者に一時的な利点以上のものを与える。他方、それはまた、当座の生活必需品を超えて、その野蛮な持ち主以外には何の価値もないわずかな私物の束を超えた富の蓄積へとつながる」⁴¹⁾ものとされた。

したがって、「新しい技術段階で、労働者が生活のために器具（apparatus）と『迂回プロセス（roundabout process）』の秩序立った順序に依存している限り、その労働は管理され、彼の勤労で生み出された余剰は会計に活用される。産業の物的手段の所有が価値あるものとなり、そのような状況での物的手段の所有権は、共同体での技術熟練という装置の有用性をもたらす」⁴²⁾ことになる。そうした技術熟練＝産業技術の所有の先に、ヴェブレンは「生産財（productive goods）」としての産業機械の出現とそれによる富（industrial wealth）の蓄積をみている。ヴェブレンによれば、そこには産業の金銭的規制（pecuniary regulation of industry）への制度変革（industrial change）が介在したとみなす。エスキモーやプエブロ・インディアンの社会に事例をとりながら、「とりわけ、西洋文明がその最も完璧な例であり、あの偉大な金銭文化をもたらした発展での結果であった。しかしながら、自由な手仕事（手工業）から金銭的産業と所有権への移行が、仮に起こるとしても、どのような形態でなされるかは、かなりの部分において、共同体の物質的状况が何を許容するかによる。状況により移転をまったく行うことができなかった場合もあったのである」⁴³⁾。ここで、ヴェブレンは金銭文化と強い関連性をもつ所有権の起源にこだわっている。なぜなら、「産業技術が十分な進歩を遂げて産業効率が向上することは、財産の所有権

を生み、人と物事、職業と製品、習慣、慣習、儀式、サービスと商品に対する金銭的評価を生み出すからである。同時に、略奪と好戦的搾取が所有権の事実と（おそらくその全歴史を通じて）密接に関連しているため、自己中心的感情が著しく強調される結果となる。経済的に重要な帰結として、自己利益が人々の理想や願望において公共の利益に取って代わる」⁴⁴⁾とみたのである。ヴェブレンによれば、「略奪的搾取」は「私利私欲」から敵を犠牲にして私益を求めるのであり、自分の利益よりも敵の損失を好むような極端なかたちをとる。

ヴェブレンの文明史観では、略奪文化は西洋文明を支配したものの、すくなくともそのような暗黒時代（Dark Age）が終焉してからは、金銭文化（pecuniary culture）へと変容していくことになる。金銭文化と略奪文化との決定的な違いは、「平和の技芸への執拗な追求（pertinacious pursuit of the arts of peace）であり、この文明を主導してきた人たちは、あらゆる休息の度につねにこの技芸へと回帰し……したがって、近代文化での職人技の感覚と習慣化の規律との間に存在する関係を理解するには、金銭文化の略奪的段階の現象よりも、平和的所有権の現象のほうが、あるいは少なくともより鮮明な関心事」⁴⁵⁾になり、現代文明は全体として「平和」な金銭文化のなかにある。ヴェブレンがこだわってきた略奪文明下の排他的かつ差別的な「所有権」は、平和的な段階では、「理論上で獲得のゲームから暴力と詐欺は排除される」⁴⁶⁾。この点は略奪文明とは異なるのであり、製作者本能—職人の本能—は、人びとの思考習慣によってつねに支配されるものである。ヴェブレンは所有権と勤勉性との関係をつぎのようにとらえる。

「いかなる共同体でも、所有権の出現に続く明らかな結果は、労働への意欲の増加である。……直ちに勤勉さが増し、すべてのケースにおいて争い、不信、策略が増加し、商品の無駄な消費が増加することは明らかである。競争的利己心によって育まれた勤勉さは、財産の獲得に向けられる。その大

部分は、所有権において個人が比較対象とする他者が所有する以上のものを獲得するためである。そして所有権という単なる刺激の下では、生産的労働、すなわち単純な意味での職人技が関わるのは、獲得という競争的目標を達成する手段として、あくまで二次的なものに過ぎないのである。所有権は、より迅速な富の獲得手段が考案されない限り、取得における勤勉さを促し、ひいては仕事における勤勉さにも間接的に寄与する。所有権がもたらす勤勉への動機付けは、その最初には、職人技ではなく事業上の命題である。したがって、職人技、産業、技術に及ぼす影響は必然的にいささか不確でかつ一律ではない。……」⁴⁷⁾。

したがって、金銭的動機の下では、職人技などの改善は二の次となり、まずはもって金銭的なインセンティブ＝金儲けの手段として優先されることを、ヴェブレンは示唆する。つまり、労働とは職人技を高めるためでなく、あくまでも「富の獲得（acquisition of wealth）」のための金銭的動機のためである。ヴェブレンは、金銭文化の浸透と富との関係について、「富の所有は、その所有者を生産的労働から免除する。そのような免除は富の証であり、したがって何も持たない者たち、つまり、働かねばならない者たちへの優越性の証である。ゆえに、金銭文化の礼儀を教え込まれたすべての人間にとって、労働への依存は不快なものとなる。この文化の卑屈で略奪的な段階での細かな作法を訓練された者たちにとってさえ、労働はこれほどまでに煩わしいものとなり、狡猾な聖職者によって、復讐心に燃える神が人類に下した最も悲惨な呪いと信憑性をもって宣言されたほどなのである」⁴⁸⁾と指摘する。このような金銭文化は、「商品の目立った消費（conspicuous consumption of goods）」が「金銭的卓越性のしるし（a mark of pecuniary excellence）」や「功績のある行為（element of respectability）」となる。この結果、その影響は「労働への蔑視（conventional disesteem of labor）」となる。この見方は『有閑階級の理論』でも強調された。

ヴェブレンはこの先に、「同様に、個人、階級、国家間の疎遠と不信もまた、相容れない金銭的利害の絶え間ない蝕みによって、この文化時代に必然的に広がる。そして、この状況は、人類の産業の総体的効率を著しく低下させ、克服すべき無益な障害と、耐え忍ぶべき無益な困難を生み出す」⁴⁹⁾ 状況をみていた。この著作の発表が1914年であったことを振り返ると、欧州を覆っていた世界大戦への動きがヴェブレンにも伝わっていたとみてよい。なお、金銭的な競争は、職人技の基盤となる知識にあたえる「偏見」を通じて産業技術の発展に影響も与える面に、ヴェブレンは注目もしている。

ヴェブレンは、金銭文化の影響について、「擬人化された表現 (anthropomorphic terms)」で進行することで、金銭的礼儀の規律の下で生きる人たちにとって、金銭的規律が納得させるものとなり、その結果、金銭文化の浸透は産業技術を衰退させると説く。「金銭文化が略奪的计划に沿って一貫して、近世西洋文明にみられる商業的段階へ移行することなく継続された場合、その帰結は産業技術の衰退と、技術的効率の基盤となる事実上の知識体系も消滅してきたのである。同じ金銭文化の本来の略奪的段階が最終的に商業的段階に取って代わられた西欧では、この方向での一般的な経緯は、略奪的(強制的)な支配が途切れることなく長く続き、知識、技術、職人技の衰退が起こった。その後、この文化の商業化が進むにつれて、技術の効率性と科学的洞察力がゆっくりと回復し、進歩して、宗教的恐怖が衰退していったこととも関連した」⁵⁰⁾。金銭文化がもたらした「特権と差別的優遇の制度 (institutions of prerogative and differential advantage)」の習慣的な実践によって、「傲慢と屈辱という自己中心的な感情 (self-regarding sentiments of arrogance and abasement)」も生まれたとされる。製作者としての本能はどのように変遷してきたのだろうか。ヴェブレンは、それでも、製作者本能は親性や好奇心などの本能とともに人間の本性に内在しているとみる。金銭的文化が「利潤と所有権の商業化」をますます進展させるなかで、

ヴェブレンは「仕事が明らかに金銭的なものであり、賢明かつ明白に富の獲得に向けられている限り、仕事に本質的に伴う不名誉は、その称賛に値する目的によって大きく相殺される。実際、それほどまでに、勤勉と抜け目ない取引によって富を得た階級の間には、平和的な勤勉さと儉約が立派な特質であるという一種の階級意識さえも芽生えさせるのである」⁵¹⁾と指摘する。

ヴェブレンによれば、これは「中流階級」の感情であり、貴族階級の商人への軽蔑感はいまだ萎えてはいない。ここでの階級構成は三層である。すなわち、「従来から認識されている3つの階級、上流階級、中流(産)階級、下流階級は、いずれも複数の経済的区分である。上流階級とは典型的に、労働や交渉を経ずに富を所有する(貴族)階級であり、一方、中流階級は商業(ビジネス)活動を通じて財産を獲得する、下流階級は労働によって生計を立てている」⁵²⁾。この3つの階級は、上流階級＝「略奪」・「役立たず (disserviceable)、だが儲かる (gainful)」、中(産)流階級＝「ビジネス」・「儲かる」、下流階級＝「産業」・「役立つ」にそれぞれ呼応する。ヴェブレンはそれぞれの階級と時代性に意義を認め上で、2番目の階級＝中流階級の出現について、つぎのように指摘する。

「金銭文化の初期の略奪的段階からそれに続く商業的段階への移行は、中産階級の台頭を示し、その勢力は文化体制の労働形態を再構築し、平和的な商取引(収益性の高い取引)を社会の支配的利益とするに至ったのである。産業技術の進歩に伴い、富の蓄積が加速され、商業取引の収益性が高まり、それに伴い中流(産)階級が成長する。この階級の意図的な利益は産業の収益の促進にある。この目的は産業の生産性と相関し、直接的ではないにせよ、技術の改善とも相関する。」⁵³⁾

競争システムが以前のような「素朴で強制的な仕組み (naively predatory scheme)」に取って代わり、「金銭的利益 (pecuniary gain)」が産業発展のインセンティブになる。こうして社会はつぎのように変化してきた。「商業的概念は、やがて日常生活の習慣に伴う思考様式の中

で最も主要かつ身近な考え方として、地位や個人的帰結の考え方にとって代わっていく。これは、貴族階級と比べると特に庶民（common man）に当てはまる。だが、上流階級が社会に課す財産基準は、この点でも他の点でも庶民の心境にかなりの矯正効果をもたらし、経済全体が商業の様相を強く帯びた後も、略奪的な理想や先入観を効果的に流布し続けるのを見逃せない⁵⁴⁾。ヴェブレンはこの章を、「価格と所有権の会計处理的なとらえ方では、略奪的生活様式、能力や生まれの良さの評価と比べると、個人の威信や影響力を著しく前面に出すことは著しく少ない。そして、そのような金銭的处理が人間関係に浸透するにつれて、非人格的な評価基準が人の外部事実に対する人びとの慣習的な理解にも入り込み、全体にますます非人格的な様相を帯びさせていく。この効果が発揮される限り、観察事実は、それに応じて増大した容易さと効果をもって技術の目的に役立つことになるだろう。そのため、文化の商業的側面は、少なくとも（寛容に）、その分野の直接的な影響に関しては、産業技術の進歩に有利であるべきである⁵⁵⁾」と結んでいる。

6. 所有権と競争システム

1. 平和的所有権

ヴェブレンは、この章の冒頭で、社会組織が金銭体制に依拠することで、「物質的利益における階級分化」、「階級特権と格差による苦難」、「財貨消費における顕著な階級格差」。これは『有閑階級の理論』でも展開された「財貨やサービスの見せびらかしの浪費（conspicuous waste of good and services）」⁵⁶⁾が関係していると説く。いうまでもなく、ヴェブレンのここでの関心はそうした消費形態ではなく、製作者の精神にどのような影響が表れるのかという点にある。それは、以前のような「支配と隷属の略奪的体制（predatory regime of mastery and servitude）」下での労働と「平和的所有権体制（peaceable regime of property）」下での労働のあり方は異なるからである。つまり、「自由

な労働者は、少なくとも直接的かつ一時的に、特に自身の問題に対する現在の認識においては、自分自身の技術的熟練度にかかなり密接に依存しており、自身の効率性を高めると期待される利用可能なあらゆる技術的手段に重大な関心をもつからなのである⁵⁷⁾」ただし、これは労働者が自身の裁量で働き、自身の生産物を処分できる限りにおいて可能である。だが、大規模な生産と投資によって、雇用主による従業員への密接な監督（intimate supervision）が行われるかぎり、労働者は自由な裁量をもつことなどむずかしい。また、手工業の初期時代（earlier days of handicraft）の職人のように自身の技量の改善などに興味をもてないこともある。ヴェブレンがこの著作に取り組んでいた時期には、『営利企業の理論』で展開された機械化と資本中心の産業資本主義が優位となり、大規模な企業組織の時代ともなっていた。それ以前の働き方は大きな変化を遂げつつあった。つまり、土地や天然資源の所有者とは異なり、資本の所有者はそれをどのようにして活用して金銭を得るかに関心を寄せる。つまり、

「これらの（資本・資産）所有者、投資家、支配者、雇用主、事業主、実業家（undertakers）たちは、有利な取引の交渉に関わっている。彼らの資産への裁量的支配は交渉によって効力を発揮し、いずれにせよ彼らの関心は利益の追求に集中する。これらの人びとは価格体系の論理にますます厳格に依拠するよう求められ、投資や事業の利益に寄与する観点から人や事物を認識するよう訓練される。すなわち、人間性に内在する自己中心的（利己的）な性向や感情、そしておそらく特に人間の弱さという観点から認識するように訓練される。」⁵⁸⁾

ビジネスの目的はあくまでも「金銭的利益」や「価格上の収益」なのである。ここでの金銭的利益とは「差額利益（differential gains）」である。したがって、「技術的洞察力や職人的な技量ではなく、この訓練（見方）は世俗的な知恵となるのである⁵⁹⁾」結果、「この平和的な所有と金銭的組織からなる現代体制が進展し、

組織と職人技の特異な特徴がより鮮明に定義されるにつれ、この二つの対照的な営み——ビジネスと職人技——の間の隔たりは広がり、それぞれの生み出す習慣の特有な範囲の差異はより目立つようになった」⁶⁰⁾。ヴェブレンは、こうしたビジネス体制下で技術的進歩も起こるのかどうか、「ビジネス原則と金銭的差別が日常の慣習 (familiar routine of life) を支配し、公共の福祉さえも価格という観点からとらえられ、ひいては差別的な優位性 (differential advantage) の問題となる。このような制度の下では、職人技のような非差別的な利益 (non-invidious interest) を冷静に追求する機会ほとんどなくなる」⁶¹⁾と悲観的な見方を示す。他方、そのような条件下でも、技術の進歩が顕著であったのは文明史的になぜであったのかと、ヴェブレンは自問する。「したがって、疑問はこの金銭文化——差別的優位性に基づいて構築され、模倣的利益と悪意ある見せびらかしの(顕示的)浪費へと収束する感情に動かされる諸制度——が、どうしてこのような技術の成長を、許容的にさせ、促進してきたのか」⁶²⁾と問題を提起する。ヴェブレンはつぎのように解釈する。

「その直接的な結果において、この金銭文化の規律は、職人的な洞察力の向上にも、また客観的現象の事実に基づく理解と利用に間違いなく悪影響を及ぼす。それは、狭義の主観的、個人的、個人主義的な意味で、実質的な核心が主観的な種類の文明であり、互いに競い合うような自尊心に基づく感情から与えられるものである。しかし、結局のところ、全体的には平和的な文化である。実際、利益と損失、没収と差し押さえというビジネスのゲームのルールがそうあることを要求している。少なくともそれだけで、おそらくそれ以外の多くの点では、北欧の新石器時代の偉大な技術時代と共通する」⁶³⁾。

いずれにせよ、人の日常生活における生活のやり取りは、「客観的で非人格的な貨幣単位 (objective, impersonal money unit)」に基づいて、「損得計算」を通したものになる。では、そうしたなかで、職人本能は喪失していくのだ

ろうか。ヴェブレンは楽観的な見方をつぎのように示した。「職人としての本能は獲得された特性ではないので、使われなくなったことで失われることはない。機会があれば、この平和的または準平和的な金銭体制の比較的平穏な状況下で、古くからの力が、おそらくは意欲に欠け衰弱しているものの、浸透力と回復力をもって現れるのである」⁶⁴⁾とするものの、その社会の文化的——多分に宗教的、封建制のあり方——な背景によってその様相は異なる。ヴェブレンはつぎのように平和的所有権の下での帰結をつぎのように結論づける。

「したがって、職人感覚とそれに伴う感情は、再び、徐々に習慣化を決定する要因の中で再度、首位を占めるようになり、それゆえに結果として生じる文化の性格を決定する。こうして、より狭義の意味での野蛮から文明への移行が成し遂げられる。これは略奪的な野蛮文化 (predatory barbarian culture) とは対照的に、限定的または緩和された(洗練された)野蛮精神への回帰、または少なくともその方向を目指す精神的な回帰として特徴付けられるが、決して突然野蛮文化に到達するものではない。新たな段階とは、典型的な未開文化と共通点を持つ。すなわち、熟練度こそが再び、習慣化の主要な規範となり、したがって制度の発展の規範ともなる。結果、共同体の理想と努力には平和的な傾向が生まれる。しかしそれは、所有権と結びつき複合化した職人技である。つまり、職人技が妬ましいほどの競争心と結びつき、結果としてさまざまに規定された差別的利益の範囲を体现する制度体系と結びついた職人技となる」⁶⁵⁾。

2. 競争体制

現在の経済理論について、ヴェブレンは「蓄積財が産業の主たる要件として重視」⁶⁶⁾され、また、組織形態としては「企業」が対象となってきたことを指摘する。企業の物的設備の多寡、すなわち、「産業の主要な推進力かつ主要な生産要素」⁶⁷⁾としての工場の規模や労働者数が重視される。他方、「社会の技術的熟練度 (community' immaterial equipment of

technological proficiency)」とは、「産業技術の状況、現在の職人的技能・効率性」である。かつては、産業支配は物的設備の所有—有形資産の所有—に直接結びついていたものの、その後は企業の株式保有へと変化し、大企業のように「信用取引」をいかに広範に利用するかが重要な競争条件となってきた。ここで興味あるのは、本書の執筆時点でヴェブレンが「起業家の役割」に注目していたことである。ヴェブレンはいう。

「従来の理論において蓄積された『生産財』が産業の最重要な要素とされ、ひいては共同体の物質的福祉と個人の運命を左右すると考えられてきた以上、それらの裁量的所有権が、人間が富の生産と共同体の生計に対して関与しうる最重要な関係と見なされるようになったのは論理的帰結であり、この所有権を調整し操作し再分配する金銭的取引こそが、産業的にみた人間活動の中で最も生産的であると考えられている。金銭的生産性（pecuniary productivity）学説が完成された形に発展し、経済理論の体系的構造—すなわち現代の『起業家の機能』理論—の中にしっかりと定着したのは、19世紀になってからである。しかし同時に、この時代になって初めて、企業活動（金銭的管理）が実質的にしっかりと経済状況を支配するようになり、社会の物質的財産が、『産業の指導者（captain of industry）』たちが私利のために参入する金銭的取引に依存するようになったのである」⁶⁸⁾。

ヴェブレンの歴史認識では、現代の産業も「手工業の興隆（the rise of handicraft or development of handicraft）」なしには成立しなかったものであり、「経済効率と有用性に関する金銭的概念」は、手工業などの技術によって可能となった基盤の上で徐々に成熟し、現在の状態にいたっているのである」と⁶⁹⁾指摘する。もっとも、ここでいう手工業者は単なる職人でなく、商業取引にも関与したことは重要であった。ヴェブレンは手工業制度を「組織化され規制された職人技と自助の体系であり、その

技術が課す条件の下で、後者における熟練は前者においても同様に不可欠であり、目的達成に不可欠であった。・・・労働者が必要な技術熟練を習得し、必要な仕事をこなしながら自分の金銭的利益を監督・追及することができなくなったため、この体制はすぐに崩壊した」⁷⁰⁾と描き、その後、高度に差別化された技術体系の出現と、輸送手段の発展による遠隔市場の拡大の下で、手工業経済の必要条件は次第に失われ、個人投資と大規模商業の実践が展開することになる。そうしたなかで、どのように「ビジネス原則（business principles）」が確立されていくのか。「手工業の効率性は、現代の『効率性技術者（efficiency engineers）』が評価するのと同様になり、つまり、機会性能、最終的に価格で、そしてとりわけ純益の観点で評価されるようになった。そのため、ギルド制度が普及していた地域社会全体に根付いた生活習慣というのは、所有権の詳細や金銭的要求と義務に対する細心の配慮を主な特徴とした。この金銭的な実践と論理での執拗かつ広範で細部まで具体的な規律から、財産の『自然権』や『ビジネス原則』が生まれ、機械産業と資本主義的投資の後の時代へと引き継がれた」⁷¹⁾。他方、ギルドとの関係は、その諸規則を職人たちが順守することで生計（livelihood）が維持された。そうしたなかで、「手工業も小商い（petty trade）を通して成長し、金銭文化の新しい局面へと移り、職人販売の区別は、産業と商業、すなわち産業的職業と金銭的職業との『分業』へと発展した。これは所有権とそれに伴う特別な配慮、特権、熟練が製作者から分離されたことを意味した」⁷²⁾のである。この結果を、ヴェブレンは、「この分業、すなわち機能の分化によって、社会の一部は所有権と金銭取引に特化するようになり、こうして金銭業務に従事する事業共同体（business community）を形成した。この事業共同体は、本来の産業共同体（industrial community proper）と並行して発展し、自らの必要に特有の慣行や慣習を発展させつつ、産業体制の発展や産業技術の状態には間接的にしか影響を及ぼさなくなった」⁷³⁾と分析した。

職人の中には職人を雇用する側の親匠(master-workman)、ギルドメンバーの小商人や行商人も市場成長の下での引拡大とともに裕福となっていった。なかには、フッガー家のように、職人世界とは間接的あるいは個人的な関係をもつことはなくなり、仲買人、より広範な貿易商人となり、「商人貴族(merchant princes)」や「金融業者」へと転換する事例もみられるようになった。あるいは、倉庫、代理店、職人を集めた工場をもち、製品の仕分け、保管、仕上げを行うようなハンザ商人も現れた。こうしたなかから、「近代的」な工場も出現する。ヴェブレンによれば、「商業取引(business traffic)」は手工業体制の発展から生まれたものであり、現在の産業体制の原理(所有権など権利等々)や利潤原則などもそこから派生しているとみなす。とはいえ、現代の体制では金銭原則が手工業時代と比べ絶対的支配力(supreme dominance of pecuniary principles)をもつ。金銭と職人本能との関係について、ヴェブレンは「職人本能は、自己顕示と悪意ある妬みの規範によって汚染されるため、いかなる行動や政策が公益に資するかという実用性さえも、その行為が実行者にもたらす金銭的見返りの観点から評価されるようになる」⁷⁴⁾とする。金銭的見返りということでは、ヴェブレンは「産業の将師(指導者)」⇔「共同体の富の公平な分配分よりも多くを独占することに成功した者」が評価される一方で、その働きによる総生産よりも自分のために転用できない者が「十分な効率性を達成できなかったという非難を受けるだけでなく、怠惰と機会損失に対する道徳的非難も受ける」⁷⁵⁾ことになる」と指摘する。

この傾向の行く末について、ヴェブレンは「このビジネス原則の体系の下では、あらゆる形で、製作者の精神は金銭的価値の先入観と不当な差別によって、そのあらゆる側面で汚染される。しかしここで直ちに問題となるのは、それが利益追求の事業の系統へと逸脱することであり、金銭文化の規律の下で、物質的な有用性の代わりに差別的利益に置き換わり、製作者の本能的

な性向が人びとの理想と努力を駆り立てるという明白な結果となる」⁷⁶⁾のである。ここで大きな役割を果たすのは「競争体制(competitive system)」,「価格体制(price system)」,「機械産業の発展と生産過程の標準化」,「消費の標準化」,「大規模産業」,「港湾や道路などインフラ」,「技術知識と習熟度」,「共同体全体の熟練度」などの諸点である。ここでヴェブレンは『営利企業の理論』でも論じた『産業の将師』によく言及する。近代資本主義における企業者の役割に着目している。ヴェブレンは「現在の経済理論の陳腐な常識に染まった者にとって、この見方は実業家の技術的功績を過小評価しているとして、当然ながら異議を唱えるべきものと思われるかもしれない。現在の理論的枠組みでは、実業家(businessman)は『起業家(entrepreneur)』『事業家(undertaker)』などの表題(caption)で論じられ、その利益は『監督報酬』『経営報酬』などと呼ばれている。彼は仕事を統括する熟練職人、船の優れた現場監督として位置付けられており、その報酬は生産プロセスへの創造的貢献に対する対価と見なされる。これは技術的問題に対する彼の卓越した洞察力と主導力によるものである。彼は作業統括の熟練職人、工場の上級職長として位置付けられており、その報酬は、技術的課題への卓越した洞察力と主導力によって、生産過程への創造的貢献に対する対価とみなされる。実業家像と産業との関係は、より古い時代、すなわち小規模な手工業や零細商業の時代から引き継がれてきた。典型的なケースでは、所有者兼雇用主が自ら労働者と作業を直接監督し、材料や完成品の買い手・売り手としての役割に加え、親方職人としての役割も兼ねていた。そして、そのような実業家とその仕事の描写は、彼が依然として小規模な産業に従事し、工場の職長としての地位についている限り、現代の状況においてもなお当てはまっている。しかしながら、現在では一過去半世紀の状況下では一、とりわけ、現代産業の類型と見なされる大規模産業の状況下においては、実業家は工場の監督者ではなく、産業に対する監視はもはやその細部にわ

たる技術的管理を効果的に包含しなくなった。これに対応して、実業家に関するこの伝統的・理論的概念はもはや当てはまらなくなった」⁷⁷⁾と指摘する。

実際のところ、実業家たちは技術や効率性についてすべて把握できるわけではない。そのため、「効率性を高める専門的技術者層（professional class of “efficiency engineers”）」が登場することになる。ヴェブレンはつぎのように指摘する。「これらの人たちは、ある意味で、経済理論で『起業家』に割り当てられた機能を担っている。彼らは一般的な技術的訓練と洞察力を備えた人たちであり、職人技を基盤に（創意工夫の）研究をはじめ、職人技の観点でデータを収集し、それを事業上の便宜性という観点から返還しようとするのである。に変換する。これは、現在の「起業家」という理論的概念が由来する小規模産業企業システムにおいて、所有者兼雇用主が行った同様の変換作業とほぼ同じ目的を果たすものである」⁷⁸⁾。効率化を進める技術者の具体的な仕事は、事業遂行での価格と利益に影響を及ぼす。他方で、ヴェブレンがいつも問題提起するのは、金銭的利益に固執する技術的な取り組みと地域社会との関係、技術者と経営者との関係、企業（実業家）と産業との関係である。実業家たちは産業の動向に鋭敏になり、自分の属する産業だけでなく関連する産業への関心も高くなっていると指摘する。ヴェブレンは、現代の実業界（modern business community）には「有閑階級（leisure class）」も「遊民階級（idle class）」も存在せず、金銭的原理がますます浸透していくことを予想している。したがって、彼らは競争の下で、金銭的な仕事以外のことに効果的に取り組む余地がなくなる。企業のような組織が従来のギルド組織に代わって産業を支配する。ヴェブレンはこの一連の変化について、つぎのように説明を加えて、この章を総括する。

「産業問題の管理での実効的な裁量権（effectual discretion）の移行は、かなりの期間をかけて徐々に、またさまざまなかたちと程度で起こったのである。しかし、この近

代的な手法への移行を決定的に促した一般的な状況は、製作者の範囲と方法での進歩であった。産業社会の運命を蓄積された富の所有者の手に委ねたのは、本質的には技術の変化、あるいはむしろ一連の技術的变化であり、それらは物的設備に関する要求を著しく拡大させたため、貧しい労働者は設備の所有者との労働協定によってのみ自らの職業を継続できなくなったのである。これにより産業の裁量的支配権は、産業の技法における製作者の技術的支配から、物質的手段における所有者の金銭的支配へと移行することになった。そのようにしてより大規模な技術的規模で起こった変化の多くは、間違いなく貿易の拡大に起因するものであり、貿易そのものもまた、直接的・間接的に技術的变化の結果として大きく発展したものである。製作者とその仕事にとっての結果は、所有者が所有する物的設備に頼らざるを得なくなり、そして所有者を満足させる条件が課されるようになった。それにより、製作者の熟練技術と産業技術の進歩の果実は、可能な限りの条件下で、物的設備の所有者に帰属した。したがって、物質的手段と産業の産物の所有者は、可能な限り抑制を最小限に抑えつつ、この技術的状況を自らの利益のために利用せざるを得なかった。同時に、状況が許す限り、競争的に共同体の生産効率のより大きな部分を自らの利益へと転用することが、彼ら一人ひとりに課せられた競争的な責務となったのである。」⁷⁹⁾

7. 手工業の時代

いうまでもなく、ヴェブレンの歴史的認識は、しばしばアジアにも言及するが、欧州大陸の発展過程に基づく。手工業世界について、ヴェブレンは歴史的—中世の暗黒時代（Dark Ages）の略奪体制から土地所有に基づく封建制へ—に、つぎのように描いている。「この移行期は、手工業（手工芸）、行商、工業都市の成長を伴った。それらは、その下で発展した封建制度をより長く存続し、また技術的特徴がきわめて顕

著であったため、『手工業（手工芸）の時代』として歴史に刻まれる』⁸⁰⁾。ハンドクラフト（Handicraft）をどう訳すのか、手工業では現在の機械生産にも基づく工業技術をイメージさせる。当時は文字通り「手による加工」がもっぱらであったという当時においては、「手工芸」の方が適訳かもしれない。ヴェブレンはハンドクラフトを、「技術的には、この時代は職人技の絶え間ない進歩によって特徴づけられ、やがて機械産業体制へと移行するまで、その技術は最終的に手工芸や小規模商業の限界を超え、経済史での独自の段階としての性格を決定づけていた」⁸¹⁾。自らの生計のためにせいぜい数人の貧しい職人（impecunious craftsmen）が働く工房と小規模商業と結びついていた。やがて、利益目当ての投資が商業へ投ぜられ、手工業へも影響を及ぼし、職人を雇い入れて経営規模を拡大する裕福な親方（wealthier masters）も現れる。手工業時代になると、生産物に価格がつくことになる。ヴェブレンは、その後の展開を「何世代にわたって、貿易と市場がさらに発展するにつれ、この価格の概念は次第に、価値ある物品はそれが高たらす価値に値するという現代的な前提へと移行した。そして、手工業と小規模商取引の時代が、後期近代的な投資と機械工業の体制へと移行する頃には、価格は買い手と売り手の間の交渉と売買に基づいて自由に決められるべきものであるという原則が、金銭関係の中核をなすようになった」⁸²⁾。企業家は機械産業へと手工業が移行する前に、すでに職人たちを支配（under the control）するようになっていた。

「手工業体制(handicraft system)」について、ヴェブレンは「手工業者制度の下では、そしてその制度が状況を形作る程度に応じて、職人の本能が再び日常生活の裁量を構成する要素の中で支配的な位置を占め、それによって人びとの思考習慣に特徴的な傾向を与えた。手工芸の技術では、核心の事実はずねに個々の職人であり、それは工芸でも小規模な商売でも同様である。その時代においては、産業は訓練を受けた個人の技能、自発性、そして応用力という観点から

捉えられており、工房の外における人間関係もまた、習慣の力によって、同様に自立した個人という観点から捉えられる傾向があった。各人がそれぞれ独立して自らの目的を達成していくという形で。その時代では、産業は訓練された個人の技能、自発性（initiative）、応用力の観点からとらえられており、作業場外での人間関係もまた、慣習の力によって、それぞれが単独で自分の目的を達成する自立した個人という同様の観点から考えられる傾向があった。当時の経済における職人の地位というのは、個々の職人を自らの足元に立つ創造的主体（creative agent）として、また社会（community）を構成する最終的に不可欠な要素としてとらえる考え方を生むのに特に適していたのである。……わずかな道具一式で、彼は目の前の仕事をこなす準備と能力を備えている。そして彼が求めるのは、自分にふさわしい仕事をする公平な機会以外何も求めていない。彼に完璧な技能を身に着けさせた訓練でさえ、特別な恩恵や優遇されて得たものではなく、見習い期間中の労働によってその代償をすべて支払った結果であり、したがって外見上はすべて自らの力と勤勉によって習得したものとみなされる」⁸³⁾のである。技能のほとんどは日常的仕事を通じて獲得されたものである。手工芸的技能を培った精神は機械の時代にも継承されている。ヴェブレンは次のように指摘する。

「手工業の規律は、機械的な力とプロセスを、手作業の技量一筋力と職人的な操作—という観点から理解することを強いる。この規律は、第一に、そして最も親密かつ強制的に、産業における肉体労働に従事する階級に関係するが、必然的に社会全体に浸透し、近いか遠いかを問わず、産業の現状に関わるあらゆる個人と階級をそのなかにとらえる。それは自らの摂理のもとで生きる共同体の生活習慣に特有の性格を与え、それによって現在の思考習慣を形成する上で支配的な形成的指針（overruling formative guide）として作用する。この習慣的な態度の帰結は、現在続く機械時代の技術に与えた影響は注目に値す

る。手工芸の時代から、いわゆる産業革命を経て、大規模産業の階層システムへと至る機械的発明や工夫は、その手工芸の起源の痕跡を残す」⁸⁴⁾。

ヴェブレンは職人と機械との関係を対立的と必ずしもとらえておらず、手工的作業の効率姿勢を高める方途ともみていた。他方、ヴェブレンの職人感覚の「自己汚染 (self-contamination)」については、前章と同様にここでもわかりづらい概念である。ヴェブレンは、手工業は勃興期から衰退期にいたるまで「下層階級 (lower classes)」に属し、職人の精神の自己汚染によって階級意識が深く根付いてその精神が形成されてきたと指摘する。この職人の意識というのは、「自らを社会に役立つ一員と評価し、この点において人の役立つものの生産に従事しない社会の他の階層と自らを対比させる」⁸⁵⁾。他方で、手工業制度がある程度発展を遂げると、地域の日常生活は市場を中心に展開することで手工業は市場動向、とりわけ、価格の大きな影響を受けることになる。こうしたなかで、価格計算—会計制度—も発展することになった。ヴェブレンは価格システムと機械技術の発展は大いに関係したとみる。すなわち、「疑いなく、価格体系は近代における機械技術の台頭に大きく関与した。それは価格の計算が工学として正当に分類されるものに不可欠な統計計算の実用形式と方法を提供しただけでなく、その規律が擬人化された偏向に左右されない用語で、機械的事実を理解することに大きく寄与したという点で、価格システムに直接的かつ実質的に関係した」⁸⁶⁾。もっとも、対象をどこにするのか、大陸欧州諸国 (Continental counties) か英国とするか、あるいは北欧諸国により、その結論は同一ではありえないことにヴェブレンが言及するのもそのためである。英国の場合、手工業は対外戦争—英連邦内の内戦を除く—の影響を被ることなく発展した。ヴェブレンは、「したがって、この時代は、英国では他国とは異なる帰結を迎える。政治の疲弊によって終わるのではなく、産業革命によって終焉を迎える。英国での手工業体制の終焉は、崩

壊ではなく技術革命によってもたらされたのである」⁸⁷⁾。同じ条件下の北欧諸国の場合には、手工業体制を維持するための人口規模の違いや天然資源の有無、国家体制の違いが英国と比べて異なった経緯—後進的であった—を迎えた。

ヴェブレンは手工業発展の背景に、人びとの宗教心—神聖への意識—の変化や学問 (科学) の発達にも着目する。つまり、「神は天の王 (the Heavenly King) であることをやめたわけではなく、また至高なる方 (the most High)、万軍の主 (the Lord of Hosts) などの伝統的な尊称で称えられることも変わらなかった。しかしやや不釣り合いなことに、神は同時に偉大なる工匠—超自然的な職人 (preternatural craftsman) —として崇められるようになった。同様に、学究的探究の最盛期には、科学的探究は確固たる基盤を求めて天の王 (the Heavenly King) の真正なる摂理へと遡った。しかし手工芸時代の規律の下では、その探究は効率的因果の基盤へと押し進められ、当然ながら、その敬虔な領域における哲学的説明において、最終的には第一原因の創造的効力へと至った。……後世において、人間の善は次第に、いつの間にか体系化の究極的根拠としての神の栄光に取って代わっていくことになる。確信の感傷的基盤は、自己中心的な神の意志の想定される必要性に一致しているかどうかではなく、確認された事実が人間にとって有用であると認識されているかどうかにある。手工芸時代の成熟期における知識体系においてきわめて重要な意味を持つ摂理的秩序 (the Providential Order) とは、人間の幸福を見据える摂理的に慈愛に満ちた創造主によって課せられた秩序である。表現されているように、それは『ヒューマニズム』の体系なのである」⁸⁸⁾。自然の摂理について、ヴェブレンは「この自然の秩序においては、この時代の終わりに思索的な人びとの当然の確信として流れているように、神の人格 (the person of the deity) は、たとえ職人的で創造的な摂理としてであっても、背景へと追いやられていた。自然の秩序は、自然法の体系とともに、完成された巧みさと独創性を持つ職

人的な働きかけの産物であり、それは達成されるべき有用な目的を見据えている。当時の深く思索的な科学的探究は、この自然全体に遍在する職人的な働きかけが、目に見える事実の世界を支配し、やがてその善き業を成し遂げることに何の疑いを抱いていなかった・・・この擬人化された自然 (quasi-persona Nature) は、その職人的な性質以外には何ら崇敬の対象とはならず、それが喚起する畏敬は神の畏れではない・・・」⁸⁹⁾と指摘する。神の技としてのこの自然観にあっては、自然と職人技をパラレルにとらえられていたともいえよう。ヴェブレンの「完璧な職人のように、『自然は決して間違いを犯さない、飛躍したりしない、無駄なことは何もしない、完璧な仕事以外は何もしない』」⁹⁰⁾という引用はこれを象徴する。しかしながら、自然の営み≡自然法則の因果関係などの証明は実際のところ不可能である。もっとも、この追及は手工業時代には真剣に行われたわけではなかった。その後の物理や化学など自然科学の発達と知識の普及はそれまでの自然観にも影響を与えたことにもヴェブレンは言及する。

ヴェブレンの見方で興味をひくのは、科学的知識の普及、とりわけ、統計的な考え方が広まることで、いろいろなことの因果関係が説明しやすくなる (comprehensive) ことがビジネス展開上の利点としていることである。また、執筆当時、ヴェブレンがマックスウェーバーのように人びとの宗教観をどの程度意識していたのかはわからないが、手工業とキリスト教との関係に言及している。たとえば、「手工業時代が決定的な終焉を迎えるまでには、この世俗的な進歩を維持してきたキリスト教世界の人びとは、信仰の刷新された形態を受け入れ、それを保持し続けた者たちでもあった」⁹¹⁾。だが、他方で、ヴェブレンはつぎのようにも指摘する。「近代産業の拡がりの中心地が、同時に宗教のプロテスタント主義と異端の拡散の中心地でもあるという事実は、十分に驚くべき偶然であると指摘されるべきである。そして、この拡がりの中心地から次第に外側へ向かうほど、信仰の古風な形式と熱意はより良く保存

されていることがわかる。そして、やや細かい点に目を向けると、より先進的な工業国の人びとほど宗教的統制を受け入れにくく、古風な迷信的儀式に傾倒しないだけでなく、これらの工業国においても、狭義の工業中心地は非工業地域に比べて敬虔さが低い、あるいはそれほど古風ではないかたちで信仰心が強いのが真実であるように思われる。確かに、そのような傾向は、手工業体制の比較的初期の段階から明らかに真実であった。とはいえ、手工業時代自体においては、工業都市の住民には不信心さのようなものは一切見られなかった。手工業の従事者たちは敬虔ではあったが、ずっと正統派というわけではなかった。また、当時の工業都市はそれなりに敬虔ではあったが、教会の既成の教義とは相容れないところがあった。彼らは敬虔な異端 (devout heresy) の中心地であった。この病がかなり進行し、ある種の背教と呼べるようになったのは、近代後期になってからである。」⁹²⁾

ヴェブレンはこうした宗教と手工業時代の規律との関係を問う一方で、この時代が経済史の上では、手工業時代とされるが、政治史では「国家形成の時代」とされていると指摘する。これは偶然でもないとする。つまり、「手工業の発達は、大国家の実現可能性を高め、大規模戦争の物質的手段を供給することに大に関与した。当時の王朝政治の駆け引きは、産業と商業の時代を不名誉な終焉へと導く上で大きな役割を果たした。新たな産業は戦争の糧を供給し、戦争は産業社会の実質を食い尽くした」⁹³⁾のである。新たな産業の成立は工業都市の商業の中心地を勃興させ、企業、海運、通信を発展させた。この「二次的な結果として、人口増加が起こり、これと並行して都市部への人口集中が進み、同時に富の増加も生じた。その富の大部分は、同じ都市部に集約される形で引き寄せられた」⁹⁴⁾。ヴェブレンは「これらの変化により、権力者はより広範な地域と膨大な人口・富の集積に対して効果的な強制力を及ぼすことが可能となった。機械的に、以前より大きな政治的集団を動かし、緊密な連携のもとで結束を維持すること

が実現可能となった。大規模な政治組織の形成と永続的な維持に必要な物理的条件は、このようにして新たな産業時代の技術的効率性の副次的な結果として提供されたのである』⁹⁵⁾と描く。こうした時代の技術について、ヴェブレンは戦争と手工業との関係を重視する。武器は手工業者によって製作・提供されていた。

手工業時代を考えるうえで留意すべきは、地主階級の権力が及ばない「(仕える)主人を持たない人たち(masterless men)」が従事したことがその起源となっていることである。手工業者は自分たちの「個人的権利(personal rights)」を粘り強く犠牲を払ってでも強く主張し、自助努力(self-help)と階級区分のない自由人として、個々の職人的効率性(individual workman efficiency)こそが個人の名声と生計の基盤であると主張したのである。この伝統、つまり、生計手段としての手工業のあり方は機械化による産業体制(機械時代)が確立されるまで維持された。機械化も含め技術の進歩によって、手工業にも物的設備が入るようになり、製造工程はますます複雑化することになる。このため、職人が単独で産業に必要な工具、器具、材料をすべて揃えることが困難となっていたのである。すべて個人所有の手工業時代から機械化と大規模組織の時代へと移ってきたことが、ヴェブレンが『営利企業の理論』でも展開したように彼の基本的な認識であった。工場を持つ者は「貧しい職人仲間の雇用主となり、彼らの労働力と生産物を処分できる立場になった」⁹⁶⁾。また、新たな材料などの登場で一般の手工業者には手に入らない時代になっていたことにもヴェブレンは言及している。工場優位の時代の登場である。ヴェブレンはこの時代＝資本主義を歴史的につぎのように総括する。

「資本主義は手工業体制の働きから、技術の規模と効率の増大を通じて出現した。そしてこの資本主義的段階がもたらした基盤の上に、15世紀から16世紀にかけて欧州の経済的運命を支配した企業活動と、産業の将師(captain of industry)たちと偉大な金融機関が君臨する時代が誕生した。これらの産業

の将師たちが運用した巨額の資金が、主に先行する小規模商取引の利益から得られたものなのか、それとも外部からこの事業分野に流入したものなのかは、議論の余地がある問題である……事實は、いずれにせよ、この状況の発展は産業設備の所有権と支配権が職人の集団の手から離れた手工業の発展に起因している事実には変わらない。」⁹⁷⁾

ヴェブレンはこうした歴史的展開を振り返るときに、英語圏(もっぱら英国)だけでなく、その傍証に自分自身のルーツである北歐圏にも言及して、もっぱらこの動きが英語圏において先行した事実—先行性—を強調する。また、後年、ヴェブレンが制度学派の祖といわれるのは、つぎのような制度的な見方にふれることが多いからである。たとえば、つぎのような指摘である。「近代を特徴づける制度的枠組み(institutional framework)の大幅な見直しにおいて、つねに考慮されるのは庶民(the common people)の生活、彼らの権利と義務であり、その生活は職人的な勤勉さと小商いという観点からとらえられる。概して、手工業の庇護下の民事・法律問題の見直しの成果は、自然の自由(Natural Liberty)の概念を含む自然権利の体系(system of Natural Rights)である。こうして出来上がった全体の計画というのは、科学者たちの探究や哲学者たちの思索を支配してきた自然の秩序と自然法則と明らかに同質のものである」⁹⁸⁾。

ここでヴェブレンが自然権を持ち出すのは、「自然権の体系に含まれる最も神聖な権利(sacred right)とは、誠実に獲得されたあらゆる富への所有権であり、唯一の条件は、それが他者の害となる用途に転用されてはならないことである」⁹⁹⁾からである。英国での歴史的展開に関して、ヴェブレンはその回りくどいような表現で、「当時、つまり、手工業時代の終わりごろ、より具体的には、イギリスの18世紀後半に、産業は資本主義的経営の下に置かれた。この変化が十分に効果を発揮するところには、労働者は自らの技能を最善と考える方法で処分する市民的権利(公民権・自然権)をすでに有し

ていた。だが、資本主義的経営の下での雇用状況は、事実上、労働者が自分の労働力を雇用主以外に、そして彼らの条件に従って処分したり、彼らの事業の緊急性によって必要とされる場合を除いては、自分の身体を処分したりすることは事実上不可能になった。同じように、不可譲の所有権 (inalienable right of ownership) もまた、手工業体制下での慣習・慣行から生じたものであったが、今や事実上、資本家の雇用主が産業の物的手段の支配を保証することになった。この神聖な財産権は、労働者が自らの選択で働く実効的な自由を回復したり、自らの身体や生産物を自由に処分したりするのを目的としたあらゆる動きを、今や阻むものとなった」¹⁰⁰⁾と指摘する。この「自然への復帰 (return to Nature)」は、手工業時代の終焉期の多かれ少なかれパスワードであったとされる。イメージ的には、「職人的な営みの日常と習慣的な平和状態 (routine of workmanship, state of habitual peace)」≡「手工業共同体 (handicraft community)」である。ヴェブレンは、手工業時代をつぎのように結論づけようとする。

「手工業時代が野蛮への回帰 (reversion to savagery) の時代であったというわけではない。ただ当時の共同体での基調をなしていた要素が、産業技術の進歩の力によって、直接的で細やかな手作業が主導的地位を占める平和と勤労の習慣へと回帰したに過ぎない。さらに、未開国家との経済的接触という点もある。手工業共同体においては、その時代の先入観 (preconception of that era) が定着して、完成され均衡のとれた原理体系の特徴をもたらした長い慣習期間の下で、富の格差は小さくなく、また決定的な結果をもたらすものでもなかった。繰り返しになるが、この時代の生活様式と、それに伴う精神構造は、欧州諸民族の性質に特に適合しているように思われる。おそらく、長身金髪 (dolicho-blond) の混血がかなりみられる人口層の生来の性向にとりわけ適合していたのだろう。そのような状況が存在する可能性は、少なくとも、この権利体系が生まれた背景と

なった条件—適合条件—がすでにほぼ消滅した後でも、これらの権利を認める体制が西洋諸国民の感情的な忠誠心をとらえているように見えることから強く示唆される。また、これらの人々、特に英語圏の人びとが廃れてしまった権利、自然権のシステムを体現し、手工業の時代に登場してその解体とともに崩壊した、あの時代の陳腐化した『競争システム (obsolescent “competitive system”)』を復活させる牧歌的な事業 (idyllic enterprise of rehabilitating) に、やや盲目的な熱意で取り組んでいることから、少なくとも強く示唆される。」¹⁰¹⁾

8. 機械産業

機械産業の時代は、さまざまな視点から論じられる。たとえば、「工場体制の時代 (era of the factory system)」, 「大規模産業の時代」, 「資本主義の時代」, 「自由競争の時代」, 「信用経済の時代 (era of the credit economy)」など。ヴェブレンはあくまでも技術と製造者本能 (workmanship) にこだわり、機械産業≡機械化の時代を分析しようとした。一般に、この時代は英国産業界の産業革命に関連して、18世紀¹⁰²⁾の第3四半期のころからとされる。その時代は科学の発達の下で、多くの機械が発明された時期でもあった。特に、英国での機械工学と機械産業の発展 (普及) が重視される。ヴェブレンは、「機械工業の始まりはこうした散発的な性質を持つ。それは手工業技術の派生として現れるものであり、特にその技術が、手作業の限界を超えるような大規模な機械的問題や、職人道具では手の届かないような領域への対処の局面で顕著となる」と指摘する。ここで「散発的」というのは、それまでの手作業が全面的に機械化されたわけではなく、その一部が散発的に機械装置に置き換えられたことを示唆する。

ヴェブレンの認識では、自由競争は、「理論」上、手工業時代から由来するが、それは機械時代になっても継続されているとみた。資本主義

は産業革命と同時期に勃興したわけではないが、その発展と拡大は機械時代に起こったととらえられた。同様に、「信用経済」も機械時代に拡大することになった。手工業時代と機械時代の相違の一端について、ヴェブレンの「機械のプロセスは計算可能であり、測定可能であり、また不可解で摂理的曖昧性の要素（mysterious element of providential ambiguity）を含んでいない。……単なる経験則のアプローチだけではなく、理論的な記述……機械工業における作業員の役割は（典型的には）補助者、助手の立場であり、その職務は機械工程に歩調を合わせ、機械工程が不完全な箇所て職人的な操作で補助することにある」¹⁰³⁾というところ方はわかりやすい。また、機械工業の発展は、初等教育の普及などによる識字率の向上や一般的な科学知識の向上とも大きく関連していた。ヴェブレンは、機械時代の到来下の社会的変化などにふれつつも一きわめて冗長に一、その関心の中心は手工業時代の影響を残しつつも、人びとの考え方や生活様式がどのように変化してきたかの点にあった。つまり、「機械論的思考様式への慣れはすでに深く根を下ろし、機械的プロセスの規律はかなり包括的かつ徹底的なものとなったため、現在では、機械論的かつ非目的論的な進化観（mechanistic, unteleological notion of evolution）が、科学者にも一般人にもありふれた先入観となった。一方、百年前には、そのような傲慢な考え方は、新時代の科学の達人たちのうち、ごくわずかな者、あるいは誰一人として、その想像力を深く揺さぶることはなかった」¹⁰⁴⁾のである。ヴェブレンは、ダーウィニズムや物質科学（material science）—物理学—など自然科学分野の動きについても言及している。改めてヴェブレンの広範な知識に驚く。ヴェブレンは、機械産業の勃興と科学の発展は相互的であったとらえている。「さらに、科学の発展に技術的規律が果たした役割についてより示唆に富むのは、科学的範囲・方法・先入観の変化の性質が、機械的プロセスの働きへの慣れによってもたらされるものと明らかに類似している点である」¹⁰⁵⁾。また、科学者

のマインドも学問的な関心からその技術的使用（technological use）へと向かうようになったのもこの時代の特徴といえる。ヴェブレンはこうした思考習慣は手工業時代から受け継がれなかったとしても、「機械プロセスの規律」の定着によって人びとに根付くことにも着目しつつ、手工業時代と機械時代は断絶したものではなく、その連続性を評価する。他方で、ヴェブレンは実業界の変化について、つぎのように分析する。

「機械産業の出現により、この金銭的効率評価は新たな推進力を得て、技術と企業活動の双方に新たな帰結をもたらした。典型的に、機械産業は手工業とは対照的に大規模に運営され、製作技と販売技の間で比較的広範かつ厳密な分業が行われることになる。この近代的産業システムが暗示する大規模所有の条件の下では、労働者はもはや産業企業の金銭的管理責任を負うことも、負うこともできない。一方で、大規模所有と広範な事業関係の同じ条件は、経営責任者に対し、工場とその技術的工程の直接監督を他者に委任し、自らのエネルギーを企業の金銭的管理とその取引に専念することを求める。

したがって、機械システムとそれに伴う高度に専門化された企業活動がより大規模かつ精緻化するにつれて、経営責任者たちは、訓練と関心の漸進的な制限をうけ、機械体制の技術的要請に対応する能力を次第に失っていく。しかし同時に、技術問題に関する決定は、所有権という力によって依然として経営者たちに委ねられている。したがって、技術的判断の責任は依然として彼らに帰属し、完全に他者に委任することはできないものの、企業経営とそれに伴う訓練の必要性により、彼らがこの責任を適切に果たすことはもはやできなくなる。」¹⁰⁶⁾

この結果は、経営者は技術の専門家（expert）—ヴェブレンの用語では「効率技術者（efficiency engineer）—を雇わざるを得なくなる。この効率技術者の「効率」とは、「金銭的効率性を意味し、産業効率性を意味するのはあくまでも付

随的あるいは従属的な意味であって、産業効率性が最大の純金銭的利益をもたらす範囲においてのみである」¹⁰⁷⁾。金銭原則の普及は、ヴェブレンの『営利企業の理論』以来の近代社会を分析する際の重要な点である。ここでは、ヴェブレンは「機械技術がもたらした条件の下では、この金銭的価値基準に基づく仕事の範囲は大幅に拡大された。全体として機械工業は大規模な組織化を必要としており、時が経つにつれて機械プロセスが産業状況をより完全に支配するようになり、その必要性はますます高まっている」¹⁰⁸⁾と現状をとらえていた。ヴェブレンはこの現状を「日常的な表現を使えば、現在の技術と経営原則の支配下では、産業は技術専門家や社会の物質的利益のためではなく、事業目的のために実業家によって管理されている。そして、この産業活動の管理において、中小企業家 (smaller businessmen) は大規模な実業家の裁量に大きく左右される立場にある」¹⁰⁹⁾とともらえた。米国経済の動向をみてきたヴェブレンにとって、機械化を前提にして成立する近代産業の主導権にとって、いかに効率的な大規模製造施設を保有するかどうかがますます重要になり、その資金をいかに確保できるかがその大きな鍵をにぎることが必要になってきたことを理解していた。その主導権は金銭取引を通じて行使され、経営者はますます価格面の変動に敏感になり、その利益を確保するかに心を砕くようになる。この視点は、この著作以前に刊行された『営利企業の理論』での結論が再度確認された感がある。とはいえ、ヴェブレン自身はつぎのように述べる。

「産業の行方を左右するこうした取引が、金銭的利益のみを目的に行われ、産業上の成果や社会の福祉への関わりは、事業遂行における付随的な事項に過ぎないというのは、やや誇張である。日常的な表現を使えば、現在の技術と経営原則の支配下では、産業は技術専門家や社会の物質的利益のためではなく、ビジネス目的のために実業家によって管理されている。そして、この産業経営の支配において、小規模事業者は大部分において大規模事

業者の裁量に委ねられている。」¹¹⁰⁾

ヴェブレンは、「産業体制」の全体像について、つぎのようにきわめて鋭く観察していた。「産業体制 (システム) 全体は、総合的な機械的プロセスとして捉えることができよう。その複数のサブプロセスは技術的に相互に連結し、分岐しながら、動的平衡状態 (moving equilibrium) にある要素のネットワークとして機能する。このネットワークでは、各要素は他の全てと適切に均衡した相互関係が保たれていなければ、最大限の生産効率を発揮できないことになる。この特徴づけ (見方) は、機械技術が産業の各分野を掌握した範囲にのみ厳密に適用されるが、機械技術がまだ支配的になっていない産業体制の要素に関しても、緩やかではあるが決して無意味ではない形で適用される」¹¹¹⁾としたうえで、「当然ながら、機械技術が産業状況を支配するに至り、あらゆる産業を厳密かつ包括的な均衡プロセスに縛りつけるならば、社会の物質的運命は、最終的には金銭的裁量権を握る大企業家の手に、あらゆる細部にわたり無条件に委ねられることになるだろう」¹¹²⁾と機械化された産業での、生産性上昇をすすめる大企業優位の将来像を描いた。ヴェブレンは最後にこの章をつぎのように総括する。

「また、上記の特徴が当てはまる限りにおいて、現在の産業の金銭的組織は、業界の産業能力の利用権益を産業設備の所有者に帰属させるという結論になるはずである。産業界の技術的知識と労働能力に対するこの用益権は、設備の実際の所有者に帰属するが、あくまで間接的 (近似的) に帰属するに過ぎない。さらに一步離れて見れば、それは、市場の価値と設備の所有権に変化をもたらす産業の金銭的条件を作り出し、管理することを可能にする大きな資金を管理する実業家たちのみ与えられる。」¹¹³⁾

最後の表現はヴェブレンらしい持った回った、わかりづらい言い回しである。つまり、大企業は手中に大資本があるからこそ、金銭的支配力を通じて、産業界を支配することが可能であり、それによって設備の市場価値と所有権一

ここでは買収などの表現が使われていないが、購入することができる—to影響を及ぼすことができるのである。アメリカ経済の大企業への経済集中の経緯やその後の展開を知る立場にいるわたしたちからすれば、ヴェブレンの立ち位置を理解できよう。

9. ヴェブレンの思索

以上、ヴェブレンの所説を紹介した。主張の繰り返しや持って回った表現に閉口する。手工業から機械産業への移行が論じられている。ヴェブレンは、本書でまずはもって手工業時代論から論を起す。同時並行的に、社会構造を読み解くいくつかの重要な鍵概念、たとえば、「略奪的」社会、「財産所有権」を中心に欧州社会の歴史を振り返る。その際に重視されたのは手工業、つまり、独立職人的社会のあり方である。その中心は独立手工業者にみられた「職人魂（精神）」の在処であった。これは機械時代にも「製作者本能」として継承されているのではないのか、というのがヴェブレンの見立てであった。手工業の下で、いかに効率的に製作をすすめるのかという「思考習慣」が形成され、定着した。

ヴェブレンはこの製作者本能の「自己汚染」について取り上げる。その具体的な事例は定かではないが、一般に、それは自分自身が生み出した要因や要素によって、自身の環境が汚染されてしまうことを意味する。つまり、汚染の発生源が自身であって、その悪影響を受けるのも自身である同一性を意味する。このロジックを手工業へ応用すれば、かつては独立職人が中心であった手工業は、職人から親方となった資力をもつ工場主や商人が資力のない職人たちを雇用して、製作者本能を離れ、金銭管理をもっぱらう存在となる。ここでは製作者本能の自己汚染が金銭管理を生み出したことになる。その後の産業発展からみれば、製作本能が技術発展をもたらし、自己汚染的な金銭管理が資本主義的経営を発展させたことになる。当時のヴェブレンを振り返っておくと、スタンフォード大学

へ移ったのが1907年であり、わずか2年ほどで退職し、1910年にはミズリー大学へ赴任している。この間に、シュンペーターが資本主義に関する著作—『理論経済学の本質』や『経済発展の理論』—を発表しているし、また、ヒルファーディング（1877-1941）も『金融資本論』を発表している。ヴェブレンもこうした著作に刺激を受けた可能性も高い。当時、資本主義経済の方向性についても、多くの経済学者も関心を寄せていた。ヴェブレンもその一人であったことはいうまでもない。資本主義の方向性はその出発点をどのようにとらえるかによって明確になる。この始点を製作本能とそこから派生した制度としての思考習慣の視点から明らかにしようとする強い意欲がヴェブレンにはあったのではないだろうか。

思考習慣ということでは、機械化の進展とともに、ヴェブレンは英国を中心とする「物質科学（material science）」＝物理学の発展とともに職人感覚の一擬人的一なものから、機械的な力の数値的な理解—量、速度、圧力等々—が定着していくことで、機械産業の確立を促したことに注意を払っている。同時に、数値的な把握ということでは、金銭的原理が会計・簿記—イタリアが先行—の下に繰り入れられ、企業家たちは数字の統計的把握や簿記・会計の下で、価格体制により敏感になり、ビジネスをより効率的に進めるようになっていく。他方、ヴェブレンは宗教信仰のあり方とその変化にも言及している。欧州諸国が手工業時代、機械時代へと移るにしたがって、中世期のキリスト教信仰、とりわけ、手工業の世界に深くかかわっていた神のとらえ方—創造主＝超自然的な職人—も緩やかに変容していく、ヴェブレンはそれを「神の摂理」や「自然の秩序」という視点から説明を加えている。自然科学による自然の理論的説明は、神の摂理を自然の秩序へと置き換え、職人がそれを再現＝製作することで社会的認知を得ることになったといっていよい。ヴェブレンはその筋道を観ていた。ヴェブレンは、手工業の発展—職人精神の浸透—が自然現象の因果関係を明らかにしようとする近代科学の発展を促し

たのではないかと主張する。産業技術の発展は手工業を苗床として起こったとみたのである。それゆえに本書では、多方面—歴史、技術史、社会史等々—から手工業の分析を行った理由もここらあたりにある。

いまでは、AIや膨大なデータベースの登場で、ヴェブレンのような多方面にわたる「博覧強記」のような研究者はいなくなった。それゆえに、わたしにはその多方面な膨大な知識を背景に繰り出されるヴェブレンの分析を理解するには、その特異な文体もあって、大変な思いを強いられる。そのすべてを、ヴェブレンの意図したとおりに理解できた自信はない。わたしたちがヴェブレンから受け継ぐべきは、機械時代からデジタルデータ・人工知能時代になって、わたしたちの経済、社会がどのような変化を遂げ、わたしたちの意識や精神はどのように変容し、それがどのようなかたちで経済、社会に反作用的な影響を及ぼすのか。他のヴェブレンの著作と同様に、本書もまた経済学の範囲を大きく超えた総合社会学といってよい。

追記（日本におけるヴェブレン研究の源流）

ヴェブレンへの関心が、いつのころから日本でもたれたのかは興味ある課題である。関西大学の学長を務めた岩崎卯一（1891–1960）は、関西大学初の留学生としてアメリカのコロンビア大学で派遣され、フランクリン・ヘンリー・ギデンス（1855–1931）の指導の下で、社会学の博士号を取得している。岩崎の教え子たちが編纂した『岩崎卯一先生を想う—』には岩崎の『社会学概論』（昭和33年、関西大学出版会）第6章の「コロンビア大学時代」が再録されている。岩崎は「ニューヨーク市に住む十数人の進歩的な教授達によって組織された『ユニコン会』The Unicorn Societyに、唯一の外国人会員として、絶えず出席した。この会の棟梁株は経済学者のヴェブレン Thorstein Veblen で、常任幹事は人類学者のゴールデンワイザー Alexander Goldenweiser であった。……」¹⁴⁾と、ヴェブレンとの邂逅を紹介している。岩崎の留学期間は、大正4〔1915〕

年からおよそ5年間であり、博士課程で学んでいた後半の2年ほどの間にヴェブレンに会う機会を得たと思われる。岩崎は大正15〔1926〕年刊行の『社会学の人と文献』（刀江書院）で「米国における一流社会学者達の人及文献」でヴェブレンについて、「ヴェブレン教授を中心とする『米国社会科学界における異端学者の群れ』を詳述する機会があると思いますから、ここでは単に履歴と著者だけを掲げます」と前置きしたうえで、つぎのように紹介している。

「ヴェブレン教授……わたくしに強い人格的影響を与えた学者です。教授の生年は明らかではありません。見たところ70歳に近いひとです。……1892年から1906年まで14年間、市俄古（シカゴ）大学に経済学教授として勤続しましたが、その左傾的思想が市俄古大学の当局者から喜ばれず、虐待を受けた為スタンフォード大学に移り、ここで1909年から3カ年務めたがここでも虐待され、1911年から18年まで左傾的評論雑誌”The Dial”編集かたがたミズリー大学に講師を務めたが、1918年大原孫三郎に似たストレートという一富豪が、紐育（ニューヨーク）に”New School for Social Research”と称する一種の社会科学研究学校を設立した時、特に招かれてその教師になり、今日に至ったのです。米国の保守的経済学者達や社会学者達に対し隠然たる一敵国をなしています……」¹⁵⁾。

岩崎は最後に、その著作には世界的名声を博した数種があるとして、10冊の署名を紹介している。そのなかに、『有閑階級の理論』、『営利企業の理論』のほかに、小論で取り上げた本書も掲げられている。戦前において、ヴェブレンに直接接したことのある研究者は岩崎を除いて多くいたとは思えない。ヴェブレンの著作の翻訳は、大野信三（1900–97）による『有閑階級の理論』が而立社から出版されたのは大正13〔1924〕年であった。ヴェブレンの著作については、福田徳三（1874–1930）が1906年（明治39年）の「マルクスの余剰価値学説論」でふれている。ここらあたりが初期のものであろう。いずれにせよ、日本でどのようにヴェブレン

ンが紹介されていたのか。その背景も含め、また、ヴェブレンの理論がどのように解釈されたのか。機会あれば調べていきたい。

注

1) 以下、引用は Thorstein Veblen, *The Complete Works of Thorstein Veblen: Economic Books, Business Essays & Political Articles* (Musicum e-Books, 2017) に収録されている “*Instinct of Workmanship and The State of The Industrial Arts*” に基づく。以下の頁数は電子ブック上で
の 3 ポイントによって異なることをあらかじめ断っておく。

2) *Ibid.*, p.661.

3) *Ibid.*, p.664.

4) *Ibid.*

5) *Ibid.*

6) *Ibid.*, p.666.

7) *Ibid.*, p.668.

8) *Ibid.*, p.670.

9) *Ibid.*, p.673.

10) *Ibid.*, p.674.

11) *Ibid.*, p.675.

12) *Ibid.*, p.676.

13) *Ibid.*, p.680.

14) *Ibid.*, p.683.

15) *Ibid.*, p.685.

16) *Ibid.*, p.687.

17) *Ibid.*, p.690-p.692.

18) *Ibid.*, p.692.

19) *Ibid.*

20) *Ibid.*, p.694-p.695.

21) *Ibid.*, p.695.

22) *Ibid.*, p.696.

23) *Ibid.*

24) *Ibid.*

25) *Ibid.*

26) *Ibid.*, p.700.

27) *Ibid.*, p.710.

28) *Ibid.*, p.712.

29) *Ibid.*, p.730.

30) *Ibid.*

31) *Ibid.*, p.742.

32) *Ibid.*, p.744.

33) *Ibid.*, p.744.

34) *Ibid.*

35) *Ibid.*, p.750.

36) *Ibid.*, p.756.

37) *Ibid.*, p.765.-p.766.

38) *Ibid.*, p.771.

39) *Ibid.*, p.773.

40) *Ibid.*, p.778.

41) *Ibid.*, p.779.

42) *Ibid.*, p.780-781.

43) *Ibid.*, p.781.

44) *Ibid.*, p.788.

45) *Ibid.*, p.797.

46) *Ibid.*, p.798.

47) *Ibid.*, p.798.

48) *Ibid.*, p.800.

49) *Ibid.*, p.800.

50) *Ibid.*, p.805.

51) *Ibid.*, p.807.

52) *Ibid.*, p.809.

53) *Ibid.*

54) *Ibid.*, p.810.

55) *Ibid.*

56) *Ibid.*, p.812.

57) *Ibid.*, p.813.

58) *Ibid.*, p.814.

59) *Ibid.*, p.815.

60) *Ibid.*

61) *Ibid.*, p.817.

62) *Ibid.*, p.822.

63) *Ibid.*

64) *Ibid.*, p.823.

65) *Ibid.*, p.825.

66) *Ibid.*, p.827.

67) *Ibid.*

68) *Ibid.*, p.829.

69) *Ibid.*, p.830.

70) *Ibid.*, p.832.

71) *Ibid.*, p.833.

72) *Ibid.*, p.833-p.834.

73) *Ibid.*, p.834.

74) *Ibid.*, p.837.

75) *Ibid.*

76) *Ibid.*, p.838.

- 77) *Ibid.*, p.840.
- 78) *Ibid.*, p.842.
- 79) *Ibid.*, p.847.
- 80) *Ibid.*, p.849.
- 81) *Ibid.*
- 82) *Ibid.*, p.850.
- 83) *Ibid.*, p.851.
- 84) *Ibid.*, p.854.
- 85) *Ibid.*, p.857.
- 86) *Ibid.*, p.859.
- 87) *Ibid.*, p.864.
- 88) *Ibid.*, p.869-p.870.
- 89) *Ibid.*, p.870.
- 90) *Ibid.*, p.871.
- 91) *Ibid.*, p.877-p.878.
- 92) *Ibid.*, p.878.
- 93) *Ibid.*, p.879.
- 94) *Ibid.*
- 95) *Ibid.*
- 96) *Ibid.*, p.842.
- 97) *Ibid.*, p.890.
- 98) *Ibid.*, p.892.
- 99) *Ibid.*, p.894.
- 100) *Ibid.*, p.896.
- 101) *Ibid.*, p.903-p.904.
- 102) *Ibid.*, p.906.
- 103) *Ibid.*, p.910-p.911.
- 104) *Ibid.*, p.626-p.927.
- 105) *Ibid.*, p.928.
- 106) *Ibid.*, p.939-p.940.
- 107) *Ibid.*, p.940.
- 108) *Ibid.*, p.944.
- 109) *Ibid.*, p.945.
- 110) *Ibid.* p.945-p.946.
- 111) *Ibid.*, p.947.
- 112) *Ibid.*
- 113) *Ibid.*, p.948.
- 114) 岩崎卯一先生生誕 100 年祭実行委員会編『岩崎卯一先生を想う―』(1991 年), 221 頁。
- 115) 岩崎卯一『社会学の人と文献』刀江書院(1926 年), 222 頁～23 頁。